

アラスカ・白い雷

機体がフェアバンクスひょうげんの空港へ下降し始めたとき、真っ白な氷原のあちこちに黒ぐろとした針葉樹林しんようじゅりんがみえた。近づくにつれてその一本一本にクリスマスしんようこの電球がつるされているように見えたので祥子は隣の女に、

「ライトアップの電球をつるしているのかしら？」

とたずねた。

「ノー、あれは雪よ」

アンカレッジから乗ってきて、膝の上に一輪だけ咲いたラツパ水仙の鉢を大事そうにかかえた女が答えた。黄色の花があまりに見事だったので、隣に座るや思わず、

「なんてきれいな花！」と祥子が声をかけたのである。

「サンキュウ」とにっこりして、それをきっかけに道中話しながら来たが、言われてみれば、それは雪が丸くかたまりになって枝や葉にひっかかっているのだった。

なんて馬鹿な事を考えたのだろう。こんなたくさんの木に電球など付けられるはずはないではないか、あれは町で暮らす人々の習慣なのだ。祥子の目に、一年間暮らしたニューヨークランドの小さな田舎町の冬の様子が思い浮かんだ。庭の木々は、

何百もの豆電球で飾られ、カーテンをつるさないガラスばりの窓から、幸福な家庭の象徴のようなオレンジ色の灯りが、ふわりとマントを広げたように、雪の庭を照らしていたものだった。

アラスカはもっと北である。厳寒げんかんの大自然の中へ、なんでわざわざこの寒いのに出掛けていくのかと、祥子はきかれた。オロラを見にゆくによと答えると「すごいわね」と口ではないながら、一種あきれられているのが分かった。―淋しいから―とつづけたかった言葉を読み込んで、元気に笑ってみせ、彼女は旅立ってきたのである。

成田からシアトルへ着き、アラスカ航空に乗り換えた。まぶしく光る海の反射の中で、整然せいぜんと直角に交わる道路を緑の木々が豊かにおおっていたシアトルを離陸し、カナダに添って機体が北上し始めた頃から、眼下の光景が一変した。シトカと地図で読んだあたりでは、海ぎわで直線にきれた氷河ひょうががみえた。北米大陸にしがみついているように点在する白い島々を、地図の上で確かめながら眺めていると、隣席りんせきの男がのぞきこんで言った。

「あのあたりでは、クジラがみられますよ。ハワイからやってくるクジラがね」

それでもアンカレッジでは、空港は黒い色をしていたのに、

一時間内陸に入ったフェアバンクスは一面の氷原<sup>ひょうげん</sup>。雪が深々と凍っている。細く一本だけ雪の中に土の色をして開いている滑走路へむけて、機体はゆっくりと着陸した。小さな白一色<sup>しろいつしよく</sup>の空港であった。

滑走路の上に、ゆらりと煙のようなものが動いている。細かい氷の粒が霧状になって、逃げ水のように道路を走るのである。その光景も、ニューイングランドの冬に経験した。一面の雪景色の中で、祥子<sup>しょうこ</sup>はやつと求めていた場所にきたようなるんだ眼になった。

「あまり深く息を吸いこまないでください。肺が凍傷になりま  
すから」

空港で出迎えてくれた日本人の青年が言った。井川<sup>いかわ</sup>康介<sup>こうすけ</sup>と自己紹介して、現地の大学で生物を勉強していると行った。あちこちで歓声をあげて抱きあっている外国人たちの中で、祥子<sup>しょうこ</sup>たちは人数の確認をした後、階段をおり、ターミナルから荷物をもって、二十歩も歩けばもう出口だった。

バスが迎えにきている。外に出るとさすがにつめたく、目の下の頬がぴりぴりと痛い。すべらないように気をつけてバッグを押し、黒人のドライバーにあずけて大型バスの高いステップをのぼった。

バスはすぐに、深々とした雪の中を走りだした。この酷寒<sup>こくかん</sup>の地に、機体からながめた黒ぐるとした針葉樹が葉も落とさずにたっている。不思議だった。

「あれはトウヒです。このあたりは永久凍土ですからトウヒとシラカバしか生えません」

アラスカの動植物にいかにもくわしそうな井川<sup>いかわ</sup>が、誰かの問いに答えて言った。

その夜すぐに、オーロラを見た。フェアバンクスは一年に二百四十三日<sup>にひやくよんじゅうさんにち</sup>オーロラが出るといいう。けれど夏は明るすぎて見られないのだそうだ。このあたりの人はノーザンライト―北の光―とオーロラを呼ぶのだということも、飛行機の中で聞いた。

駐車のためだろう、ホテルの前庭は雪かきがしてあり、その雪を土手のようにまわりにつみあげてあった。ブーツのつま先で蹴ると、粉のように散るパウダースノーで、その雪を越える時、踏み固めた場所をはずれると、すっぽりと腿<sup>もも</sup>のあたりまで身体が沈んだ。祥子<sup>しょうこ</sup>たちは用心ぶかく、積み上げた雪をこえ、ホテルの裏のチェナ川におりた。川は今、上を自動車が走れるほど凍っている。ホテルの灯りがとどかない所までおりると、夜は森閑<sup>しんかん</sup>と原始の闇の暗さで、祥子<sup>しょうこ</sup>たちは時間を見計らって、凍った川面<sup>かわも</sup>でオーロラを待った。

帽子とマフラーの間にわずかに目だけだして空を見上げてみると、またたくまに息のかかる部分だけマフラーがばりばりと凍る。裏に毛皮をはったコートとブーツの着ぶくれた姿で、物音ひとつしない厳寒げんかんの戸外で待っていると、やがて、トウヒがシルエットになって空と地面をくぎっているあたりに、白い雲のきれはしのようなものが現われる。あっと息をつめている間に、それは青みをおびた若草色の帯状おびじょうにみるみる発達して大きくなり、片方の地平線からもう一方まで、天空にかける大きな橋のように頭上をこえてのびていく。見上げると細部のヒダになつた部分がめまぐるしくゆれて踊るように動き、やがてその天てんの橋はし自体が渦巻いて形をかえ、カーテンのように垂れ下がり、端がピンク色に染まって、あーと叫んでいる間に夢のように消えてゆくのであった。

わずか十五分ほどの夜空のショーは、見終わると深いため息が出て、あれを本当に見たのだろうか、幻ではなかったかという思いにとらわれ、もう一度見て確かめずにはいられない気になつてくる。けれどその後二時間、オーロラは現われない。

様子しようじたちは、二時間ごとにホテルの入り口のホールに集まりオーロラを待った。戸外では防寒用の衣類で顔も身体もかくれ、誰が誰か分からないが、ホールで待っている間は顔も見えて、

話しあううちにオーロラツアーの他の人々とも親しくなった。

夫婦づれの参加者が五組いた。小柄で積極的にみえるショートカットの妻と、いつも柔和な表情の夫というカップルは深田夫妻であった。小柄な妻が、

「娘がギリシヤ人と結婚してブリュッセルにいましてね。子供が生まれたので世話をしに行つて、とうとう二年もあちらでいたんですよ。言葉もできないのに一人で行つてね」

と笑いながら言うと、いかにも朴訥ぼくとつな夫が弁解するように言葉をつづけた。

「家内は無鉄砲でね。男は部下を持つと無茶はできないものですよ」

うなづく男たちの間で、深田ふかだ夫人は少しやんちゃな表情で笑っていた。

大学の同級生がそのまま夫婦になつて年を重ねた感じは綾川あやがわ夫妻で、髪に白いものが交じりながらも、二人とも姿勢のいい、服装も所作も都会的なカップルだった。

何日目のかの夜、なぜわざわざアラスカへ？という話になつて、綾川あやがわは言った。

「私は、長年石油会社で働いてきたんですよ。今はもう引退して、関係がないんだが：ガソリンには含酸素がんさんそ化合物かごうぶつを混入して

いるんですがね、アメリカでは排気の浄化のため義務づけられているし、日本じゃ、オクタン価かをあげるために混入しているんですが：それを使うと、世界中でこのフェアバンクスだけに、頭痛や吐き気を訴える人がでたんですよ。どうも気になっていましてね。なぜここだけなんだろうと：もちろんオーロラに牽ひかれてやってきたんですが、なにか分かるかもしれないなんて：長年頭の中は石油のことしかなかったもので：」

それから彼は、「この零下何十度もの気候で、エンジンが凍ってしまわないよう夜じゆうアイドリングしている車があるから、不完全燃焼のせいかな。それに地形的なものもあるでしょうね」と言った。

建物の外にコンセントがついていて、そこにプラグをさしこんで、夜じゆうずっとエンジンをあたたためている車が多いのを、みな物珍しく見ていたところだったので、ひとしきり話はずんだ。

「私たち今はやりの夫婦別姓なんですよ」

と目の大きな妻が自己紹介して、ウンウンとうなずいてくれてさそうに笑っているのは桑野庄司くわのしょうじと山村かすみやまむらだった。二人の間には、年令を越えた初々しさがあって好感がもてた。

大学の先輩後輩だという男性二人組は、いつも見学の途中ス

パーによつては、ビールやワインを仕入れるのに忙しかった。女性の単独参加者の中でも、寺田幸子てらださちこは東北地方からの参加で、ぼつぼつと話すその口調がいかに誠実で信頼できる感じで、祥子しょうこはバスの中でよく彼女と並んで座った。

一番若い高村江利子たかむらえりこは、夫を一年ほど前に亡くしたといい、自由な身なので参加しましたと言ったが、それ以上は話さず、いつもひっそりとグループの後うしろからついてくる。

昼間、祥子しょうこたちはアラスカ大学の地球物理学研究所ちきゅうぶつりがくけんきゅうじよで、見事なオーロラをスクリーンで見ながらオーロラがなぜ起こるのか、赤祖父教授あかそふかきょうじゆから講義をうけた。天文や電気の知識のない祥子しょうこには、いくら日本語で講義をうけても、しかとは分からなかった。

アラスカ大学の博物館ではマンモスの骨や、グリズリーの剥製はくせいにまじって、巨大な草原バイソンがどっしりと座っていた。青みをおびて「ブルーベイブ」と愛称がつけてある剥製は、三万六千年前の氷河ひやうがから現われ、あまりにも肉付きがいいので、アラスカ大学の研究者たちがこの肉をシチューにしてたべたと説明がつけてあった。

五日目になってダウンタウンのインフォメーション・センターでアラスカの野生生物のフィルムをみた後、町を歩いた。その前日からオーロラが見られなくなり、「暖かくなってきました

から、明日は雪かもしれない」と生物学者の青年が言ったとおり、町には雪が降り初めていた。祥子しょうこたちの到着した日から、零下三〇度四〇度の日が二、三日続き、そのため毎晩オーロラが見られたのだと、彼は説明した。

「日本では寒くなると雪が降るのにね」

「なんだか変よね、暖かくなつたから雪ですよって：」

口々にいいながら、町を歩いた。降りしきる粉雪は、帽子やコートの上に止まってははらりと落ちる。風景をおぼろにかすませて降る雪は、町も人も包みこむような懐かしさで、空気の澄んでいた零下三〇度の頃より、確かに暖かいような気がした。

町を歩いていると日本人そっくりの顔だちの現地人たちに何人も出会った。イヌイトと正式には呼ばれるエスキモーの人たちである。昔大陸が地続きだった頃、日本へもアメリカへも人類の祖先たちが歩いてわたって来たと言われても、実感はなかった事が、こうして実際に日本人そっくりの人たちに何人も出会ってみると、遠い地球の歴史が事実であったと祥子しょうこたちにも納得できる気がした。

大通りではイヌぞりレースが始まっていた。つながれたイヌたちがけたたましい声で降りしきる雪の中でほえている。マツシャーたちは今にも飛び出そうとするイヌたちをなだめながら、

出発のアナウンスを待っている。手元の簡単なブレーキと片足でそりをおさえているが、合図があると勢いよく雪の地面をけって飛び出し、やがて走り去って見えなくなった。帰ってくるのは明後日ときいて、祥子しょうこは気が遠くなる思いだった。

マツシャーの一人はコースでムースに出会い、持っていた斧で戦った末に殺したんだよと、横にならんでレースをみていた男が、日本人だときいて話しかけてきた。

道路の向こうでは、毛皮のオークションが始まっていた。何十枚もの毛皮が頭も足もついたままで売られている。降りしきる雪の中で毛皮の帽子に毛皮の服をきた人々が、手にとったりひやかしたりして値段の交渉をしていた。

祥子しょうこたちは郵便局の前を通ってバス停まで歩いた。木の色の新しい丸太小屋が雪帽子ゆきぼうしをふっかりとかぶって埋もれそうに建っている。それがバスの停留所だった。大きなガラス窓から、中でバスを待っている人々が見えた。

「あれがバス停なの？ 可愛い建物ね」

「そうですよ。他のお客さんも一緒ですから、遅れないようにしてください」

祥子しょうこたちは小さな道路を、車を何台もやりすごしてから、すべらないよう用心して渡った。雪の中を歩くのが子供の頃に帰

ったようで嬉しく、心ははしゃいでいる。

待合室の客はほとんどが男性だった。内部の暖かさにほっとして奥まで進むと、反対側のドアの側に、一人の年配の女が立っていた。エスキモーの女なのだろう。茶色の裏皮のコートは、もう何十年も着ているらしく色があせており、白髪のみじった褐色の髪をうしろで小さくまるめ、細い肩をおとして雪の戸外を眺めている。どこか日本の田舎の駅に立っていても違和感がないような日本人そっくりの顔立ちの女だった。後のベンチに彼女の荷物らしいものが積み上げて置いてある。一番上には、はっと目をみはるような紫色の袋のついていた。鮮やかな赤みをおびた紫である。その色の上に白やピンクやばら色の花々が浮き上がって咲いていた。あまりの鮮やかさに、祥子は目を奪われ、最初それは刺繍なのだと思った。

「素晴らしい袋をお持ちですね。なんて美しい！」

思わず身がかがめて袋に目を近づけながら、祥子は言った。

女は振り返って、かすかに口元をほころばせて

「サンキュウ」と答えた。

「これは、刺繍でしょうか」

「いいえ、絵の具で描いてあるのですよ。友人が描いてくれたの」

「すてきですわね、春の花のバッグですね」

祥子のまわりにいた深田夫人や幸子がよってきて、感嘆して袋をながめたりさわったりするのを、女は親しい顔でほほえみながら眺めていた。

やがて外で小さくクラクションがなって、赤い車がドアの側にとまった。電話番号を大きくボディに書いてある。このあたりのタクシーなのだろう。女はそれをみると、荷物を手にとりはじめた。タクシーをよんで、今から家に戻るであろう。祥子が女をみてほほえむと、彼女は、

「ナイス ミーティング ユー」（お会いできてよかったわ）

と握手の手をのばしてきた。祥子はなぜか胸がつかまってその手を両手でにぎりしめた。もう二度と逢う事がないであろうこの美しい袋を持った女と別れがたい気がした。

「私たち、日本からきましたの。お会いできて嬉しかったですわ」

日本ときいた時、女がふっと目をあげたような気がした。あつと祥子は思つて、この人はエスキモーではなくて、日本人だったのだろうかと一瞬心が騒いだ。

「ずいぶん遠くからいらしているのね。よい旅を祈りますよ」  
「ありがとうございます。さようなら。お気をつけて」

袋をもって出ていった女を目で追う形になった。赤い車の窓から花の咲き乱れた紫の袋が一瞬みえて手を振ったが、女は振り返らずに前をむいたままで雪の中へ消えた。

タクシーを呼ぶのは、女を迎えにくる家族がいけないという事なのだろうか。赤い車は、どんな場所へ女を運んでいくのだろう。一期一会のゆきずりにかわした二言三言を、祥子は心の中でもう一度反芻しながら、胸の奥が痛くなった。亡くなった母も生きていればあのくらいの年令かと、しみじみと懐かしかった。それからふいに、もしかしたら、女の姿は、未来の自分であつたかもしれないと思つた。

祥子は見えなくなった車の後を追うように、遠くを眺める目になつた。

祥子が一年暮らしたニューイングランドの田舎の町も、冬は零下二〇度に下がって、外は一面の真っ白な雪だつた。どの家にもピクチャー・ウィンドウとよぶ一枚ガラスの窓があつて、オレンジ色のあかりが、夜になると雪の庭を照らしていたものだ。

四十才をこえてから、祥子は一人アメリカで暮らした。

サラリーマンの夫と二人で、二三年毎に国内をあちこち転勤

暮らしをしていた間は、二人の間はおだやかであつた。夫の昇進で本社のある郷里の町に帰って以来、自分の方をむいていてと信じていた夫が、そうではなかったと思われる事が多くなつた。夫の母親との神経のすりへる付き合いで祥子はくたびれた。長男である夫に子供がいけないことが気にいらぬ姑は、祥子がなんとか努力してつづけてきた翻訳の仕事を嫌つて、「女のつとめはまず跡継ぎを産む事ですよ。子供も産めないで本なんか出したつて何にもなりやしない」

と無神経に言い放つた。祥子が怒りのあまり黙っていると、最後の言葉はいつも、

「だいたい、私は初めからこの結婚には反対だつた」

と言うのである。結婚した時、高校の英語教師をやめたくなかつた祥子が、夫の転勤に単身で行つて欲しいと言つたのを、今でも根にもつた言い方だつた。

そのうち、子供がいけないのだから、夫の弟の家から子供を一人養子にするようにと姑にしつこく勧められるようになった。

「断つて」と何度も言つたが、夫は返事をにがし、三日にあけずの姑の電話や訪問で、電話の音がすると祥子の右手に赤い湿疹がでるようになった。

その頃、毎年送られてくるアメリカの大学の講座案内をみて、

祥子は半年間だけでもアメリカへ行こうと思った。逃げだしたかったのである。費用は翻訳で貯えた貯金で何とかなるだろう。書類をそろえて大学へ送ると、簡単に希望のコース取得が許可され、ひとまず、秋の新学期まで、二カ月間語学の準備のため

にサマーコースに入る事にした。  
離婚する気かと、夫は言った。それでもいいわよ——と祥子はやぶれかぶれで答え、

「あなたが養子を貰うつもりなら、別な女を探して。私、このままでいると発狂しそう」

と訴えたが、夫は何をおおげさな、と取り合わなかった。

サマーコースで祥子はノーマンに出あった。ニューイングランドの夏にも、時に蒸し暑い夜があり、その夜眠れないままに本をよんでいた祥子は、窓から聞こえてくるピアノの音にきづいた。あれは、ドビュッシー：そう思いながら細かい英語を読んでいたが、ついに気になって宿舎の三階の部屋から外へ下りていくと、ピアノは、ゴチック建築のチャペルの、ウイングと呼ぶ袖の部屋から聞こえていた。芝生の中に筋のようにのびている小道を通って、チャペルのほうへ行く途中で、祥子は額の汗をぬぐい、そのハンカチを芝生において、腰をおろした。ピ

アノの音が間近に大きくなり、祥子は少し感傷的になった。

よくコンサートに出掛けたものだった。ピアノもヴァイオリンも、それから歌曲もほんとはよく出掛けて聞いたものだった。音楽会には夫と揃って出掛けた。唯一の共通の趣味だったのだ。自分はそんな夫との家庭を失おうとしているのかもしれない。

どのくらいそうしていたのか、暗やみに目が馴れて気がついてみると、芝生に座って音楽を聞いているのは祥子だけではなかった。十メートルほど離れた所に男性の姿がシルエットになっており、祥子はあわてて立ち上がった。

「ハイ。ボクはノーマン。もう行くのかい？ ラヴリーな音楽だね」

よくひびくバリトンで気軽に話しかけられて、祥子は身動きができなくなった。

「そうね。あんまり蒸し暑いから、出てきたのよ。私はシヨコ。日本からきたの」

「食堂でよく会うから、知っているよ。いつも一人で座っていて、深刻な顔してるよ」

「あら、深刻な顔してる？ 気がつかなかったわ。一人でいるのは、食べるのと話すのと同時にできるほど、英語がまだ上手じゃないからよ」



明るい笑い声が起こつて、その男は言った。

「とんでもない。とてもビューティフルな英語を、君は話しているよ、今」

「ありがとう、もう行かなくちゃ。おやすみなさい」

「じゃあ、明日の朝、食堂で会おう。おやすみ」

顔もよく見えないほどの暗さで出会った男が、翌朝、やあと気軽に祥子の前にセルフサービスのトレイをもつてきて座った時、祥子は驚いたけれど、少し嬉しかった。

見上げるように大きな彼は、同じサマーコースで物理を教えているのだと言った。

朝食だけでなく、夕食も一緒にするようになり、早い夕食の後、いつまでも暮れないニューイングランドの宵を、キャンパスの中の湖まで歩いて散歩するようになり、二人はまたたく間に親しくなった。夫から離れて一人で来た祥子と、結婚して二十五年目に初めて妻とは別々の夏を過ごすのだというノーマンは、最初から互いの家族の事を話しあっていたから、それ以上の事は起こるはずもないとたかをくくって、祥子は傾斜していく自分の心を、わざと気づかないふりで、親しくつきあっていたのだった。

「私は翻訳をやっていたのよ、日本ではね。でも、ずいぶん思

い違いが多かったのじゃないかと、ここへきて思うわ」

祥子はある日、ノーマンに言ったことがある。

「例えば、夏という言葉ひとつをとってみても、私の中にその言葉が喚起するのは、蒸し暑くて、がまんできないほどイヤな気候で、仕事も勉強もできないから、しかたなく夏休みをとって休むって感じよ。でも、ここにいると、夏はあんまり良い気候で、まわりが美しく、仕事や勉強するにはもったいない季節だから、みんな楽しまずにはいられないのね」

「そうだね、冬が長いから、夏の間はできるだけ戸外で楽しむのが当然と考えてるね」

「それに、植物の名前も、何も考えないで訳してたけど、例えば、ほら、この羊歯。日本では羊歯は日陰にひっそりと生えて、繊細でレースみたいな女らしい植物よ。でも、これ見て。私の肩まであるわ。堂々と日の照る場所に、勇猛に生えている力強い植物よね。ああ、何て印象が違うのかしら。今までの翻訳、全部やり直したい気分よ」

ノーマンは愉快そうに笑い声をたて、それから、もっと違うものがあるかとたずねた。

「そうね。動詞についても思うことがあるわ。ラヴって本当によく使うのよね、アメリカ人は。そのシャツ素敵ねって言いた

い時にも、アイ ラヴ ユア シャーツでしょ。友達同士でもよく大好きよっていう時ラヴよね。男と女が愛するっていう時と、どう違うのかしらって思うわ。どこで、本当の恋愛感情のラヴと、一般的なラヴを違えるのかしら」

祥子はいい終えて、あ、自分は危険な事を口走っていると、気付いてあわてた。

ノーマンが立ち止まって一瞬祥子を見つめ「アイ ラヴ ユー」と言った。二人の間の空気が重くなった。水の底にもぐったような息苦しさだった。祥子は、あわてて水底から勢いよく足をけって浮き上がろうとするように、

「まあ、まるで、君のセーターきれいだねっていうみたいに、言うのね」

自分の声がうわずっているのが分かった。ノーマンが強い目で祥子を見つめた。あつ、怒らせたかもしれないと思った瞬間、祥子はノーマンの腕の中にすっぽりと強く抱き寄せられ、彼の体温が伝わってきた。祥子は欲望が噴き上がってくるのをおぼえた。

「あたしには、分からないわ。どこがちがうのか？」

言いつづけようとする祥子の唇が、ノーマンの唇でふさがれて、祥子は何を話していたのか分からなくなった。

夜が近付いていた。もう、帰らなくては：祥子がささやいたので、やっとノーマンは彼女をはなした。

夏はまたたく間に終わって、二人で出掛ける湖の表面に、煙のように霧がたち昇るようになった。彼も祥子も無口で、用心深くなり、ただ黙って離れて歩き、ひきこまれそうな静かさの中で、時に静寂を破って鳴く鳥の声に驚いては、ため息を吐いて帰ってきた。

祥子は自分がノーマンに魅かれているのを、みとめないわけにはいかなかった。

夏のコースが明日終わるという日、祥子は思い切って言った。「すばらしい夏だったわ。ありがとう。あなたの事、忘れないわ」

それは別れの言葉であった。ノーマンは苦渋にみちた表情で、祥子のほうへむいて

「シヨコ、神が君をボクの人生に与えられた事を感謝している。信じられないくらいだよ。どんなに、幸福か：ボクたちの夏は：素晴らしかった：シヨコ、親であるという事は、とても重い：ボクの気持ちは分かっているだろう」

私には子供がいないのよ、だから親の気持ちは分からないわ

：

祥子は心の中で言いながら、夕闇の中で涙を流した。生まれて初めての甘く、しかも苦い感情であった。

祥子の宿舎の前に来た時、一人はもう一度軽く唇をあわせた。祥子は熱病にかかったような気持ちで鍵をあげ、部屋に入り、そのままベッドに倒れこんだ。

それっきりだった。ノーマンは帰っていき、祥子もまたホームステイをひきうけてくれた家族のもとへ旅立ったのである。

熱病はなかなか直らなかった。少年と少女みたいな一夏の恋がいつまでもつづくわけがないと思いつつ、祥子は激しい思いでノーマンをひと目でも見たいと思いつつ、会って話したくなり、抱き締められたくて何も手につかなかった。

カレッジのコースが始まり、大量の宿題をこなさなくてはならなくなったのに、気がつけば思いは彼の所にあつた。ふいに、部屋の隅にノーマンの視線を感じて、ドキリとしてふりむいたり、夜になるとしきりと涙が出たりした。

秋になり目をみはるニューヨークの紅葉を、祥子は心の中でのノーマンに話しかけながら眺めた。こんなすごい紅葉は初めてよ、ノーマン。あなたがいつも口癖のようにいうテリフィックだわ。ほら、あのメイプルの枝をみて。真っ赤だわ。ほ

らこちらは日に溶けそうな黄色、ああ、私はこんなに苦しんでいるのに、あなたは学生たちを、平気で、あの笑顔で教えているのねー祥子は時々神に祈るようになった。

一か月に一度でも、いや三か月に一度でも、ノーマンが自分の所にきてくれるのなら、アメリカにこのままずっといたい：祥子は一人でぼんやりと考えては、なんて馬鹿なことを、気でも狂っているの：と唇をかみ、ひっそりと涙をこぼした。

登録した四つのコースのうち「言語の認識」については、諦めねばならないだろうと祥子は思った。毎週五十ページに近いテキストのリーディングが、理解できないのである。米文学史は楽しく、テキストの中に出てくる小説をほとんど日本語で読んだことがあるので、楽だった。特別教育で障害児教育の考え方に目を見開かれ、最後のアメリカの女性史は興味がつきなかった。

秋が終わり冬になり、ニューヨークは白一色の世界になった。ノーマンの住む町は、半年以上雪の中で、厳しい気候だと聞いたことがある。祥子は

「日本の南のほうにある私の町は、めったに雪が降らないわ。一センチでも積もるとバスも車もたいへんで、学校は休みになるの」

ノーマンはそれをきくと大笑いして「ワシントンと同じだね」と言った。

あの時、祥子は、零下何十度にも下がる所には自分は住めない、たとえノーマンと一緒にでも……と思っていたのだ。けれど今、祥子の住むニューイングランドの田舎の村は、深々とした雪中にあって、その中に建つ白い家々の庭に、モミの木が三角形に枝をひろげ、クリスマスカードのような美しさだった。外は寒くても、部屋の中には暖炉が燃えている。電気で充分暖房が入っているのに、赤あかと火が燃えるのを見るために、人々は木を燃やすのである。祥子は自分が、緑あふれる夏より、絢爛の紅葉の秋より、もっとこの荒涼たる白一色の冬の光景に心魅かれるのを覚えた。きりきりと胸の一ヶ所が切なく痛むような風景であった。

クリスマスに一度、ノーマンからカードが送られてきて、あたりさわりのない挨拶の言葉の最後に、G L Y S D I と書かれてあった。祥子はいくら辞書をひいてもないこの言葉にこだわって、長い間考えていた。祥子もあたりさわりのないことしか書かなかったので、二人の関係は進展するはずもなく、これでもいいのだと自分を納得させてもいた。

二月になって、ノーマンからもう一通手紙がとどいた。あの

最後の日に、君ともし一緒だったら何が起こっていたかをずっと考えている：そして、その手紙の中で祥子は裸にされ、ノーマンを受け入れていた。彼の欲望に触発されて、祥子の体も熱くなつた。

けれど祥子はその手紙に返事を書くことができなかった。何をどう書いていいのか分からず、とうとうカードのすみっこに「サムデイ（いつか）」と小さく書いて送っただけだった。彼は失望したのか、恥じたのか、それ以来手紙は来なくなり、祥子もまた書けなくなつた。

アメリカから帰って二年たつて、祥子は夫と正式に別れた。友人が教えている高校で、急に英語教師がやめ、頼まれて最初は非常勤で教えていたのを、学年が変わって正式に教諭として採用される事になった。翻訳だけでは生活は無理だったが、子供もいない女一人、なんとか教員になれば自立できると考えたあげくの離婚だった。

何度も祥子は、自分が憎んでいるのは夫ではなく、その背後の家系の存続を言い続ける夫の母や、日本の家制度なのだと考え直そうとしたが、心はもう戻らなかつた。

離婚のことをノーマンには知らせなかつた。旧姓に戻った説

明をするのもおつくうだったので、新しい住所を知らせることもなく、当然、ノーマンからの便りはとだえた。

そうして五年、春の休みを利用して、祥子はアラスカ旅行に参加した。ノーマンが住む大きな滝のある町より、もっと極寒の地である。日常的には、もうほとんど忘れて暮らしているノーマンを、祥子は雪の中で思い出していた。一人の男を切なく恋しがって暮らしたアメリカの冬が、そしてその頃の自分の一途さが懐かしかった。

もしあの時、アメリカから帰らなければ、どんな事になっていたか、祥子はひとりぼっちで気のめいる夜よく空想した。ノーマンは最初こそ、祥子を訪ねてくるだろう。けれどやがてその回数は間遠になって、自分は一人で暮らす事になるであろう。それが、祥子の結論だった。日本語を教えることもできるかもしれない。けれど、祥子の見聞きしたフィリピンやシンガポールから移民してくる女たちは、たいがい老人施設で働いていた。それが手っ取りばやくお金になったからである。女たちの中には、朝早くから一つの施設で働き、夕方四時からまた別の施設で寝る間を惜しんで働いて、またたく間に自分の家を買う女もいた。それほどはしなくても、なんとか女一人、生きていけそうな気がして、祥子はある時期、本気で考えて、

ノーマンによほどその決心を書き送ろうとしたことさえあったのだった。

そんな事をしたら、馬鹿で純情で愚かな日本の女に、彼はへきえきしたであろう。

バスの停留所で出会った女が、もしエスキモーではなく日本の女だとしたら、どんな事情があったのだろうか。祥子のように、恋をして、しばしのめくるめく幸福とひきかえに、今、雪の降りしきる最果ての町で、ひっそりと老後を一人暮らしているのだろうか。

それも良いではなかと祥子は思った。

暖炉の傍で思い出す男があり、捨ててきた過去があり、たとえ寒さと飢えでいつか一人で死ぬ事になっても、身体の覚えている快樂を抱き締めて、自分は思うように生きたのだと思えたら、それもまた良い人生ではないのか。

紫の花の袋が、祥子の脳裏から離れなかった。あれは、本当に美しい袋だった。ユリも描かれていたような気がする。バラやユリの白やピンクの花弁と、雄蕊と雌蕊の黄色いぬめり：祥子は同じアメリカの北寒の地で、雪に埋もれて暮らしているであろうノーマンが恋しくて、両腕でしっかりと自分自身を抱き締めた。

祥子が、エスキモーらしい女と話をしているのを、山村かすみはバス停留所に入ってきたとたんに気が付いた。祥子は女の子の手提げ袋を誉めていた。紫色の地に白やピンクの花と若草色のすじのような葉が夢のように描かれた美しい袋だった。

「私の友達が描いてくれたのよ」

と女が答えている英語が、かすみの耳にも入ってきて、かすみは袋を眺めたが、その時ちようどこちら向きになった女のひつつめに結わえた髪とその顔が、あまりにも日本人的だったので、かすみははっとした。それからかすみの胸が早鐘のようになり、うちだした。傍へ行ってもっとよく見たいと思う心とは裏腹に、かすみの足は釘づけになり、どうにも前に進まなくなった。桑野が横からどうしたのかと顔をのぞきこみ、かすみの異様な表情に驚いて、肩に手をおいた。彼はその女をじっとみてから、かすみの肩を押した。

「行って確かめてきてごらん」

と桑野の手が言っていた。さあというように、桑野の手がもう一度肩をおした時、かすみはいやいやと首をふって、桑野を見上げた。

「そんなはずはないわ」

目でかすみは桑野にいった。

「だけど、もし：という事もある。傍へ寄って見てきてごらん」

桑野も目だけでそう促した。

かすみはなおじつと女の様子を眺めていた。小柄でもう七〇才はこえているだろう。細い下がった肩が、かすみと似ているような気がした。何年も着込んだ茶色の古ぼけたコート姿で、女は荷物を五つ六つ傍の長椅子の上に置いていた。花束みたいな美しい紫の袋が、紙袋をつみあげた上にふわりとのっていた。

祥子が目をちかづけて、袋に描かれた花をみている。油絵の具のように光ってはいないから、あれは何で描いたのだろう：かすみはうつろになった心でそんな事を考えていた。時間が過ぎれば、女は行ってしまふ。今、何でもいい、言葉をかけたい：かすみはそう思いながら、足が動かなかった。

やがてガラスのドアの向こうに赤い車が現われた。番号が大きく書かれてあり、タクシーだと知れた。女が祥子のほうへ手をのびした。

「ナイス ミーティング ユー」

それから、女は何気なくまわりを見回した。かすみと一瞬目があつたような気がした。

あなたは、あなたは、日本人ではありませんか？ 日本に、女の子を残してきてはいませんか？ かすみは一瞬の目に、強い思いをこめて女を見返したが、女の視線は何事もなかったようにかすみの顔を通りすぎてしまった。

女が出ていった。かすみは大きく息をはいて、肩におかれた桑野くわのの手の中に倒れそうな重心をあずけた。桑野くわのがそんなかすみを支えるために腕に力をいれたのが分かった。

(あなたは：もしかしたら：もしかしたら：)

ふいに祥子しょうこが、こちらを向いて、大きな花のような笑顔で、かすみに笑いかけた。

「とてもきれいな袋だったわねえ。ごらんになった、山村さん？」

ええと頭でうなずいて、ふいに女と言葉をかわした祥子しょうこが羨ましくなった。かすみは、わざとふざけたように祥子しょうこの傍へ寄っていった

「ナイス ミーティング ユー：ってこうしたわね」

と祥子しょうこの手をにぎった。祥子しょうこも笑いながら両手でかすみの手をはさみこんで

「ナイス ミーティング ユウ トウ。あの人の手、とても暖かだったわ。エスキモーの人ってほんと日本人そっくり。私、ごきげんようって日本語で言いかけたくらいよ」

祥子しょうこが言ったので、まわりで軽い笑い声が起こった。祥子しょうこの手から伝わってきたあの女の手のぬくもりを、今かすみはしっかりと自分の手に移しとったような気分だった。

「あら、気がついたけど、あの人の目、山村さんやまむらにちよっと似ていたわ」

祥子しょうこはそう言って、目を遠く女が去っていった雪の降る町のほうへむけた。

かすみの父は、弟の健一けんいちがまだ母の胎内にいた頃、戦争で死んだ。本当に運が悪かったと、何度も祖母が言っては泣いていたのを覚えている。若かった母は、二人の子供をつれて実家に帰りたいと何度も懇請こんせいしたが、健一けんいちは跡取りだから、帰るならかすみだけを連れて行けと祖父に言われた。祖父は気性の激しい、何かと言うとすぐ怒鳴るような人で、言い出したら聞かない人だけに、母方の祖父もやってきて話をしたが無駄であった。母方の祖父は、子供と一緒に婚家こんかで苦勞をするか、実家に戻って子供と離れてつらい思いをするか、どちらかだと若かった母に言い、母はまだ一歳にもならない健一けんいちを置いていく事ができずに、苦勞を承知で残ったのだと、母の妹である叔母から聞いた事がある。学校に勤めていた母が、経済的にも、一人で一家

を養う羽目になったから、「あちらの家では離せなかつたんじゃない？」というのが叔母の意見だった。

そのうち、父の妹までが未亡人になって戻ってきて、母はますます苦労をしたらしい。その上、大陸のほうへ行っていた父の弟が突然帰ってきて、祖父母が家のために母と結婚するのが全てもうまくまとまるから：と言われたそうである。かすみははつきりとは覚えていないが、祖父がずいぶんと母を怒鳴っていたのが記憶の底にあつて、突然母がいなくなった時にも、子供心に「あんなにおじいちゃんに怒られたから、いられなくなつたんだ」と納得した覚えがある。

つらくて淋しくて、お母さんはどこ？ と、何度も泣いて祖母にくつてかかった事もあり、夜中が過ぎても泣きやまないかすみに、祖母はほとほと困り果てるとよく親類しんるいのものにこぼしていた。

大きくなると、弟の健けんいち一とは、扱われ方が違ふと何度も思うようになり、反抗して抗議すると、お前は女で、いずれどこかへ出ていくのだから：と言われた。跡取り息子とは違ふのだと言うのであつた。かすみは自分を捨てた母を恨んで育ち、中学の頃から母の事はいっさい誰にもたずねなかつた。高校を卒業するきわになって、急にその頃家を継いでいた叔父から短大へ

行けと言われた。急に言われても受験勉強もしていないのに：と嫌がるのを、何がなんでもと強制されて、近くの短大を出ると、すぐ建築会社に就職して家を出て、そのまま一人暮らしが長くつづいた。

一度来るようにと、母のたった一人の身内である叔母から手紙を貰つて、就職して何年かたつてようやく訪ねていった時、短大へ行くようにお金を送ってきたのは、母だったと知らされた。

家を出た母はあれから日系二世の男と再婚して、日本でしばらく暮らしたのち、アメリカに渡つたと言うのである。あんまり思いがけなくて、にわかには信じられなかつたが、

「あの頃のドルはとても値打ちがあつたから、あなたを短大にやつても、まだ余裕があつて、ずいぶんとあちらの家も助かつたんじゃないの？ でも健ちゃんの時には、もう送つては来なかつたそうよ。本当は、あなたを引き取りたいと何度も手紙を書いたそうだけど、お祖父さんがあのとおりでしょ？ 頑として返事をしなかつたみたい。でもちやつかりお金は受け取つてねえ。勿論、あなたに全部使つたりはしなかつたでしょうよ」初めて聞く話に、かすみは何故、いつも家の中で無視されつづけたのに、急に短大へ行けと言われたのか、納得がいった。



自分を気にかけてくれる人が一人でもいたと思うと、ぼおっと全身が熱くなつて嬉しかった。けれど、アメリカのどこなの？ときいたかすみに、最初はバーモント州とやらいう所だったけど、次に何でもアラスカというとても寒い所へ行くと手紙がきて、そうそう、フェアバンクスとかいう所らしかったけど：かすみも短大を出たのだから、後はなんとか一人で生きていけるでしょう、私も日本のことは忘れます：という手紙が最後にきて、それっきりなのよ：

叔母は「可哀そうに」と涙を流した。母のことかかすみのことか、可哀そうなのはどっちと言っているのか分からなかったけれど、多分二人のことであろうとかすみは思った。

その時点で、かすみは本当に一人ぼっちなのだど覚悟をきめた。弟の代になつた山村家やまむらにも寄り付かなかつたし、法事や祝いごとにも、少々の送金をしてすませた。真面目で熱心に残業もいとわず働いたから、勤め先では重宝がられて、何度かすすめられた結婚の話ものらくらと返事をのばしているうちに適齢期と呼ばれる時期もすぎて、かすみは五〇才の大台をこえ、おだやかな優しい人柄と人には言われている。

長く独身で暮らしていたかすみの前に、妻をなくした桑野くわのが現われたのは三年前で、何度も映画やドライブに誘われ、やが

て二人は結婚する事になった。けれどかすみの予想どおりに桑野くわのの子供たちの反対にあつた。財産相続の事が問題なのであろうと、かすみは、籍を入れない別姓のままではないのではない？と提案し、友人たちに披露するだけのささやかなパーティをして、一緒に住むようになった。一緒に暮らしはじめて二年目に、桑野くわのは定年退職し、第二の勤め先が日本海側の小さな町に決まつた。かすみのほうも、今さら永年の勤めをやめる気もなく、二人は週末だけ一緒に暮らす別居結婚という形である。

母の妹の叔母が入院したときいて、見舞いにいったのは去年の秋であつた、なまじ母の事をきくと、怒りと恋しさが今でも噴きあげてきて、何日もどうしようもなく苦しい日が続くので、叔母の所へも寄り付かなかつたかすみであつた。けれど今度こそ、せめて古い母の住所でも聞きたいと思つて決心して行つたが、叔母はアルツハイマーの症状がひどく、かすみを見分ける事もできない状態だつた。

母から手紙がどこかに残っていないかしらと、従姉にきいたが、叔母は貯金通帳まで燃やそうとしたくらい手当たり次第に火をつけてまわり、それで病院へ入れる事にしたのだと言われた。

桑野くわのが「オーロラの旅」と書かれたパンフレットを持って帰

り、もう申し込んでおいたから：と言った時、滞在がフェアバ  
ンクスで一週間と読んで、かすみは桑野の気持ちを理解し、全  
身がふるえた。

最初の夜に話した母のことを、気にかけてくれていたのだ：  
私にはこの人がいる、長い間一人ぼっちだったけれど、今はこ  
の人がいる：涙がふくれあがってくる目で桑野を見つめて、か  
すみはただうなずいただけだった。

旅の最初の夜から、オーロラは絢爛と空に現れた。ホテルの  
裏の真っ白に凍ったチェナ川に立って待っていると、みるみる  
若草色のカーテンが虚空に垂れ下って、ものすごい勢いで揺れ、  
下のほうがわずかにピンク色に染まり、空に住む巨人が手でた  
ぐり寄せたかと思われるように大きく渦まき、やがてふいに色  
があせて消えていく。空がもとの星空に戻っても、かすみは今  
見たのは幻だったのだろうかという思いに捕らえられて、なか  
なかホテルへ戻る気にならなかった。

三日目、犬ぞりに乗ろうと桑野が言い、完璧な防寒着で乗っ  
たはずなのに、かすみは風邪をひいた。大事をとって四日目は  
外へ出ずに、一日ベッドですごし、母はもう生きていないので  
はないか：としきりに思った。今日はダウンタウンへ行くとき  
いて少し無理して出てきて、バス停であの女を見かけたのであ

る。

小さなおかつぱ頭の女の子だったかすみを、今五十才をすぎ  
たかすみの中に、母が見付けられるはずはないのである。かす  
みにしても、頭をうなだれて、泣いていた若かった母の姿をぼ  
んやりと覚えているだけである。記憶の中には母の顔などなく  
て、ただ部屋のすみで白いブラウスと紺のスカート、黒い髪  
毛が後で束ねてあったことくらい：その姿も、実際にかすみが  
見たものなのか、あるいは勝手に想像したものなのかあやふや  
なのである。

—あなたには、かすみという娘がいませんでしたか—  
一生に一度の大決心で、あの時そうきいてみたら、どんな事  
になっただろうか。

叔母がアルツハイマーときいた時、悔やんでも悔やみきれな  
い後悔でのたうちまわるような思いをしたのに、今またかすみ  
は、わずかな可能性を、ほんの少しの勇気がなかったために失  
った気がした。

けれど、九十八%まで、母である筈はないという気もした。  
やはりあれは日本人ではなく、現地の人だったのだろう。けれ  
どそう思いながら、アラスカにパイプラインが作られた七十年  
代に、多くの人にまじって母もまた夫とともにきたのではない

かとも思った。そのままフェアバンクスにとどまり、何かの事情で夫に先立たれたか、あるいは病む夫のために、今日は雪の町に買い物にきたのか：考えていると、かすみは涙が出てきた。

義弟ぎていとの結婚を嫌って、とうとう子供二人を置いて出ていってしまった母を、かすみは子供のためにならどんな犠牲も払うという「普通のお母さん」とは違うではないかと、中学や高校の頃心底恨んでいた。子供に対する愛情が薄い、冷たい人なのだとも考えた事がある。けれどかすみは、短大の頃、戦後、憲法が古い家制度を廃止したのに、家を存続させるために、未亡人が義弟ぎていと結婚して家をついだ事が多かったと日本女性史で知らって、母がそんな女でなかった事にほっとした覚えがあった。そんなご都合主義の結婚は、まるで売春と同じではないかと、烈しい憤りと女としての情けなさを感じた。

「でも結婚って、多かれ少なかれ、そんな要素があるんじゃない？ 女は家にいて、男の稼いでくるお金を貰うんだから：」親友の悠子ゆうこが言ったのを覚えている。かすみは決して、性を提供して家で養われる女にはなるまい、自分で働いて生きるのだとその時思った。

結局、長い間結婚もせず、一人で暮らしたから、あの時の気持ちはまんざら嘘ではなかったのだろう。子供を持ちたいと

一時熱望いちじねつぼうした時期があつて、そのためだけにでも結婚を：と思つた事もあつた。けれどそんな時、若かつた母の泣いている姿がぼんやりと思ひ浮かんで、子供を持ったために、実家にも帰れず、それなのに結局は婚家からも出て行かざるを得なかつた母の不幸を思うと、子供もよしあしだと思われたのであつた。かすみは母が家を出た年令をはるかに過ぎて、今なら、母とただ懐かしさだけで逢えそうな気がする。老いた母と一緒に暮らせたなら、どんなにいいだろう：外にはまだ、雪が降り続けている。

高村江利子たかむらえりこは、一行の中ではいちばん若かつた。五〇代から七〇代の人たちの中に交じって、江利子えりこはひっそりと息をつめているように静かだった。このアラスカ旅行を一週間世話することになった井川康介いかわこうすけは、そんな江利子えりこのひっそりとした静かさが最初から少し気になっていた。彼はアラスカに魅入られたようにやってくる、自然保護の運動に参加したりしていたが、現在はアラスカ大学で生物の博士課程はくしかていに在籍している。日本語が話せる人が緊急に必要なのでと教務から担当の教授をとおしてこの旅行の世話を頼まれた。

日本にはもう十年以上帰っていない。この十年日本の経済成

長は、アラスカにいても実感として感じられた。野生動物の研究者か、七十七年に完成したパイプライン関係の企業マンしか来なかったアラスカにも、ごく普通の日本人観光客がくるようになり、彼らの落とす金がフェアバンクスの経済を潤すのである。アメリカ各地からも観光客はきたが、日本人の買物のしかたは、何というか、見境いもなく、といった感じで、つまらないものに何百ドルも平気で支払う様子を見ると、康介は時々情けなくなった。康介の生活費は、かぎられた奨学金だけで、一週間にわずか二十ドルほどで暮らした事もある。

長年住んで、今はもうアラスカ人だと自分では思っているから、日本人観光客が大いに金を使っていくのはフェアバンクスにとっては良い事だと割り切ろうとするが、あまりにも買物にうつつをぬかしている様子を見ると、腹がたち、恥ずかしくもなってくる。つまらないものを五つ六つと数買い込むのは、近所や知人や親類への土産物なのだと分かりながら、康介はそんな買物のつきあいをさせられている自分自身を、時ににがにがしく思わないではいられなかった。

ただ一人、高村江利子だけが、まったく買物には関心を示さなかった。グループ旅行なので、一行が買物をする店には一緒に寄って店内をみてまわりはするが、いっさい手をださない。

康介はこれもまた奇妙だと思わずにはいられなかった。一人で参加した様子の江利子は、特別に仲良くなった人もいないらしくて、アラスカ大学の博物館でも、これがマンモスの骨で：などと説明しようとする、康介のすぐ傍で熱心にきいていた。

ホテルの二回のマールブルームと呼んでいるホールで、康介がアラスカの生物について話した時にも、夜のオーロラの観察でついいねむりの多い人たちの中で、一人目を見開いて、まばたきもせずに彼が示すスライドをみてうなずいていた。

康介は夏の休みを利用して二か月のキャンプ生活をした話をした。セスナで目指す場所におろして貰うと、後二か月、彼は一人である。誰とも話すことはない。一人でテントをはり、水をとり、沢におり、持ってきた米をたき、後は生物の写真を撮ったり、採集したり、あるいは特殊な動物の数を数えたりして暮らす。夜は一面の星空。巨大な蚊にくわれないよう用心しながら、他の人間にまったく逢わずに暮らすと、次第に独り言が多くなってくる。グリズリーと呼ぶ熊にも用心しなければならぬ。意識を使うのは、今現在、自然界で生きのびるといふことだけで、未来も過去も康介の頭の中から消えている。

けれど冬になって、雪に閉じ込められてアパートの部屋で一人いる時、康介は自分の未来を考えていたたまれない思いのす

る時があった。このまま好きな研究をしても、どこかへ就職できるあてがあるわけではない。日本の友人たちとはつき合っていないが、彼らはそれぞれ会社に入り、結婚し、子供をもつて社会の一員として生きているのだろう。

自分には何があるのか？ そんな思いが特に強く康介を悩ませるようになったのは、昨年まで一緒に研究していた森沢が、オーストラリアのキャンベルにある環境自然研究所へ行ってしまうてからだ。彼は、ツノメドリが断崖のほぼ同じ高さの所に巣を作り、ほとんど同じ時に卵を産むのは、それを取りにくる敵から同時にかえったヒナたちのうちいくらかでも生き延びさせるためではないか、敵にやられるより多くのヒナがいれば確率としてそうなる、という論文を書き、井川康介は、そうではない、もっと別の理由があるはずだと論証する研究をしていた。二人は夜通し議論して、故国から遠く離れた二人っきりのアラスカの夜を耐えていたのだ。

森沢は、一足先に未来を見付けた。彼はやがてその研究所の正研究員として迎えられ、どこかの大学で教える事になるだろう。康介は親友のために喜びながらも気が滅入った。

一人でやりきれなくなると、彼は町のバーへ出かけた。白人はほとんど行かないバーである。自分と同じような顔つきのエ

スキモーの男たちが、人なつこい笑顔で話し掛けてくると、ほつと救われた気分になって、彼らのクジラとりの話や、カリブーやムースと格闘した話を、ウンウンとうなずきながら聞いているのであった。

一夏海岸で、崖の途中に巣を作つてヒナを育てる「ツノメドリ」の数を数えて暮らしました、と話した後で、江利子がめずらしく寄つてきて、

「数が増減すると、何か人間にも関係があるんですの：その、温度とか作物とか」

とたずねた。康介はすぐに、はいて捨てるように答えた。

「それは人間サイドの考え方でしよう。彼らは彼らですよ。何の関係もない」

江利子は、すみません、と言ってそれ以上はつづけなかった。

江利子には彼のなんととはなしの不機嫌が感じられていた。それは悲しみと言つてもいい感情のようであった。彼が何を悲しんでいるのか、それは分からなかった。けれど、誰がどのよう悲しんでいるか、自分の悲しみのようではないと思うと、江利子は天涯孤独という言葉をとめ息と共に胸の中で思った。

江利子がアラスカへきたのは半分仕事からみである。といっても、仕事を始めたのはちょうど一年前からで、東京近郊にあ

る自然志向が売り物の出版社で、さまざまな行事を計画するのが江利子の仕事であった。江利子がそこで働き始める前から、希望者をつのつて雄大な自然を訪ねる旅をするのがその出版社の年中行事の呼び物の一つで、今度はアラスカの野生動物を見たり、オーロラを見る旅を計画してはどうか、それには、一応下調べのつもりで行ってくればよい：とオーナーの木村に言われた。夢中になって働いてきた一年間への褒美だよ、よくやってくれたからねーと冗談のように言われて、江利子はあやうく涙がこぼれそうになった。

こんな事になるとは夢にも想像できなかった。高村との結婚生活は、子供が生まれなかった事以外、他の夫婦と別に変わってはいなかったと思う。彼の法律事務所が自宅のすぐ前にあつたから、江利子は昼食の用意をしなければならなかったが、それも出掛ける時には準備してテーブルの上に並べておけばよいので、別に不自由だと思つた事はない。四十才を前に、時々、高村が自宅に戻る時間をはかつて、食事をあためるためにガスに火をつけると、ふいと、一瞬の風のように虚しさが心に吹く事があつた。青い炎の向こうに、江利子の知らない世界があるのではないか、自分はこうしてこのまま朽ちていくのか―じつとガスの前で立ち尽くして、帰ってきた高村に「どうし

た？」と声をかけられてはつとすることもあつた。

高村と自分が性的にうまくいつているのかどうか、江利子は誰にも相談した事はなかつたが、高村は途中で江利子から離れてしまふ事がよくあつた。仕事が心から離れないのであるうと、江利子はその事で不満を口にした事もない。高村が相当無理をして、仕事を受けているらしい事は、事務所の山口が一度「こんな事件ではとても：」といつているのを聞いた事がある。

「いいじゃないか、うちの評判にはなるよ、少しくらいリスクはあつても、後で取り返せるじゃないか、良い仕事さえすれば：」

高村がそういつているのを、江利子は頼もしいと思つてきいていた。

日本がいわゆるバブル経済に突入した頃、高村の事業も順調らしく、江利子はよく余分な金を渡されて、外国旅行でもしておいで、いつも昼間も食事の用意があつて出掛けられないのだから：と言われた。たった一人の姉に話すと、羨ましがられ、一人でパック旅行に参加したり、あるいは大学時代の友人に久しぶりに声をかけて誘つたりで、多いときには年に二、三度ヨーロッパ方面に出かけた事もある。高村は、宝石類を買つてくると喜ぶので、江利子もつい、ぜいたくと思いつつブランド品

の並ぶ店へも、気後れなく足を運ぶようになった。

高村が土地の売買をしているらしいと聞いたのは、隣に住む高村の母からである。姑とは最初から別居で、姑は亡くなった高村の兄の子供を戸籍上養子にして、高村家の本家は、その子が跡を継ぐという話になっていた。兄が若くしてなくなり、兄嫁も交通事故で亡くなったからである。敷地の一部を年の離れた次男である高村が相続して、事務所と住居を作り、姑とは近くではあるが、まったく別の所帯で暮らしていた。「バブルがはじけた」と言われるようになって、高村からは別段変わった様子も感じられず、江利子は心配もしなかった。仕事が終わると二人で犬をつれて近所を散歩し、一日が終わった。おだやかな日々であったと思う。

一 今年の秋のはじめ、事務所の山口が、何か江利子に言いたそうにする事が二、三度あつて「なにか？」と問いかけると「いや」と言いよどむ。

「いやあね、なによ？」と冗談めかして言っても、「いやいや」と首をふりながら江利子に背をむけた。江利子は、夫の事業がうまくいっていないのか、それとも、土地がさがったとテレビが連日くりかえすので夫も少々損をしているのかと、思った程度だった。

暮れが近くなつて、例年のように年賀状の準備をし、デパートへ歳暮を送りにいった。昼にかかるので、地下でみかけたすし折りを三つかつてタクシーで帰つてくると、家の前に救急車がとまっていた。金をはらつてタクシーをおり、戸口からかけこむと、山口が白衣の救急隊員と庭の藤棚のあたりからぐつたりした夫の身体を運びおろす所だった。何が起こつたのか分からなかった。「あなた」と叫んだような気がするが、後、どうしたのか覚えていない。夫の首の無残な赤黒いすじで、夫が首をつつたのだと分かつた。すぐさま傍に投げ出してあつた衿まきをとつて夫の首にまいて傷をかくした事は確かだが、後は運ばれていく夫について救急車に乗つた後、何がどうなつたか思い出せない。

冬の事だから藤の花が咲いていた筈はないのに、それ以来、江利子の頭の中では、満開の藤だなの下に、ぶらりと夫の身体がさがっている。紫色は鬼門となつた。

祥子やかすみだが、紫色の袋をもつた現地の女性と話している時、江利子は思わず顔をそむけた。アラスカの一面の雪景色は白と黒の墨絵のようで、江利子はアラスカにきて以来、モノトーンの世界で久しぶりに心がおだやかに安らいでいたのだ。女のもつ袋は強烈な紫だった。藤色ではないのに、江利子の

脳裏にまたあの満開の藤と夫の姿が、その紫をみたたとんに、ぐらりと扉が開いたようによみがえってきた。

夫の借金は、土地や家屋を処分しても払えるような額ではなかった。覚悟の自殺であった。おまけに江利子たちの土地の何倍もある高村家本家の家や土地、田圃もごっそり抵当にはいつており、老いた姑も、江利子同様、住み慣れた家を出ていかねばならなくなった。それを聞くと姑は発作を起こして倒れ、入院する事になった。「江利子さんが贅沢をするから：あの子は：あの子は：」と姑は倒れる前に言ったと聞かされて、親類中の針の視線のなか、江利子はいたたまれなかった。

葬式をおえてかたづけられている時、姉が「そんなにしなくても：」と何度も言ったが、江利子は、夫のセーターも着物も、黒いゴミ袋にどんどん投げ込んで捨てた。自分をこのような立場においたまま、一人で逝ってしまった夫が心底卑怯な男に思われ、煮えくりかえる激しい怒りに襲われていたのであった。

けれど、全てが終わってみると、江利子はすぐ生活の心配をしなければならなかった。ダンスも家具も、冷蔵庫まで差し押えの札がはられて使えなくなり、江利子が持っているのは少々の香典だけで、さしあたってどう暮らせばいいのか見当もつかなかった。

葬式の後始末をしている間に、彼女は四〇才の誕生日を迎えたが、気づかずにすごした。就職口などあるだろうか、ぼろぼろになった心と身体で考える日々がつづいた。

姉が亡父の友人の木村が、新聞で江利子の夫の記事をよんで、働きに來ないかと言ってくれている：と電話をくれた時、江利子は救われたと思った。すぐ返事して、木村の所まで会いにいき、その日のうちに働かせて貰う事になった。家を失った彼女のために社宅の一室を用意しようと言ってくれた時、江利子はありがたくて初めて声を出して泣いた。

それ以来、つきあいで客を呼ぶからと言われれば、夜であろうと嫌がらずに木村の自宅にもいき、江利子は無我夢中で働いてきたつもりである。彼女の提案した催しものが評判がよく、マスコミでも取り上げられたりしたので、少しずつ自信もついてきた。

けれど、夜一人で社宅に戻り、何もないガラんとした部屋にバッグを投げ出してごろりと横になる時、虚しさがそくそくと身をかんでつらかった。

もともと友人の少ない江利子であったが、夫の異様な死でその友人たちも失った気がした。当分は仕事しかない：そう思ってたなんとか一年、一人ぼっちの生活を耐えてきたのである。



アラスカ旅行に何組かの夫婦がいて、くったくなく口争いをしてるのを聞くと、江利子は胸が痛んだ。何と幸福そうな光景なのだろう。何十年かを一緒に生きて、別れたいと思うほど憎みあった事も何度もあるだろう。けれどこうして、退職後、夫婦で元気に一緒に旅するというのは、江利子から見れば、もう二度と戻って行くことのできない、江利子がふみはずしてしまつた光輝く道に思えた。

バスに乗って、アラスカ大学まで行き、教室の一つで、講義をきいた。大きな画面でビデオを見せてもらった。とくに心に残つたのは氷河である。グレイシャーベイで、何万年もゆつくりと動きつづけてきた氷河が、春になって海へ落下する様子が画面いっぱいに写しだされた。

傍に寄ると氷河の表面は決してなめらかではない。とがった氷の柱がぎつしりと押し固められて氷河になつていたので、凹凸のある、とても歩けない険しさだ。雪山と雪山の谷間に、白くあるいは灰色がかつてびつしりとつまつた氷の帯の表面に、何本か黒いすじが見えるのは、川が合流するように、あちらの氷河とこちらの氷河がくつついた跡で、それを数えると何本の氷河が一緒になつてここまでできているのか分かると説明があつた。一年に二センチほどの移動で、気の遠くなるような時間を、

ゆつくりと海まで動いてきた氷河が、氷の絶壁となつて海面にそびえ立つ時、断面図ともいふべき氷河の内部が見える。所々横に縞模様が入つていて、そこは緑色がかった青い色と砂の茶色が交じりあい、透明でも真つ白でもなかった。

ぎつしりとおしつけられた氷柱と氷柱のわずかに筋のような割れ目が、長い旅をおえて海辺にくると、少しづつ広くなり、やがて後から押されるようにゆつくりと身を倒して先端の氷柱が海中に落下してゆく。氷の粉をあたりにまき散らしながら。すると、ゴォーと大きな雷のような音がして、海はしぶきをあげてこれをむかえ、それから大きな波があたりをざぶりと飲み込むように、画面の前方に押し寄せてきた。

江利子はまるで海水が自分のほうに本当に盛り上がつてきたような気持ちになつて、おもわず後ずさりした。井川康介がそんな江利子の様子に、ふつと微笑んでいた。

春になると始まるこの氷河の落下の音を、現地の人々は「白い雷」と呼んでいます、新しい季節の始まりです。とナレーションがはいった。

「こんな場所にも、人は住んでいるのですか？人が生きられるのですか？」

江利子が質問した。

「私も夫と子供と一緒にしばらく住んでいましたよ」

長い髪を背中にたらしめて、目の大きな、まるで少女みたくに細い身体の、氷河ひょうがの専門家だという女性教授が言った。夫と二人で家を建て、そこに暮らして、子供が生まれる時にはセスナでジュノーの病院へ行って産みました。ずっとそこで暮らしたかったけれど、仕事がないのでフェアバンクスに出てきました。彼女はそれ以来、地球環境を保全する運動をしつづけていたと言った。

井川いかわが出てきて、壁にかけてある地図の一所をさして言った。

「このあたりが今、先生がおっしゃったグレイシャーベイですよ。この少しひっこんだ所はリツヤベイなんですが、写真家で、ずっとこのフェアバンクスで暮らしている星野道夫ほしのみちおさんの書いた本の中に、このベイで二十二年間一人で暮らした男の話がでてきます。彼は一年に一度、リツヤベイから三百キロはなれたジュノー：ここですが：へ、ボートを漕いでやってきて、銀ぎつねの毛皮を売り、塩サバを一樽ひとたる買って、捨てないでとっておいて貰った一年分の新聞を貰ってリツヤベイへ帰る。それからまたたった一人で、毎日一年前の新聞をきっちり一日分ずつ読んで暮らす。ほんのたまに、人がリツヤベイへやってくる、時間をきいて時計をあわせたそうですよ。それから、クリ

スマスには一人で何種類もの木の実はいったケーキをやいて祝って：勿論、死ぬ時も一人だったでしょうね。アラスカには、そんな原野げんやで一人で生きている人がかなりいると思います」

後はつづけなかったが、江利子えりこは井川いかわもその写真家の星野氏ほしのも同じように大自然の中で一人で暮らす強靱きょうじんな精神をもっているのではないのかと思った。

午後、自由時間に江利子えりこたちはクロスカントリースキーをする事になった。一面の雪原を黒トウヒくろとうひの林がぐるりととり囲んでいる場所だった。最初はトウヒが並木になってたっている道路らしき所を通っていたが、江利子えりこは初めてのスキーに足元ばかり見てどんどん夢中になって進むうち、気がつくまで雪の中に一人ぼっちになっていた。後を振り返ったが仲間は誰もみえない。方角もたたず、急に江利子えりこはぞっとした。今きたトレイルを帰っていけばいいと足元にのびる二本の線を目でたどってみたが、はっきりしない。おまけにすこし雪が舞いはじめて、この分ならやがてトレイルは消えてしまうにちがひなかった。夕方であった。初めてのクロスカントリーに夢中で、しばらく感じなかった寒さが、首すじや、足もとから容赦なくしのびよってきた。

—どうしよう。みんな心配しているにちがいないわ—

どうしていいか分からなかった。とりあえず来た道と思う方角へひきかえしてみたが、雪とトウヒの木だけしか見えない風景の中では、どちらから来たのか全く分からない。気のせいか気温がぐんぐん下がってくるようで、日没の時間も近付いていくようだった。

江利子は恐ろしくなったが、その一方で、このまま雪の中に横たわって眠ったら、それで人生が終わりになる、それもいかもしれない：そんな気持ちひそかな甘い誘惑となって心の中に広がってくるのを感じた。けれどすぐ、そんな馬鹿な事を考えてはいけない：井川やこの旅に一緒にきた人たちに、どんなに迷惑がかかる事か、と思うと、なんとか帰り道を発見したい思いであせった。

けれど動けば動くほど、帰り道から遠ざかるようで、江利子は泣きそうになった。夫が藤棚からぶらりと下がった姿がまた思ひ浮かんだ。日がかげった灰色の風景の中で、濃紫の藤と瞳孔のあいた夫の目が近付いてくる：ああ、やめて、来ないで——：江利子はしゃがみこんだ。

自分は死ぬのかもしれない。怖い：死ぬのは、やはり怖い：でも仕方ないではないか：膝をかかえて、江利子は目を閉じた。

その時、遠くで「高村さあん」と呼ぶ声がした。井川康介の声だった。

「たかむらさあ——ん、えりこさあ——ん、いませんかあ——」  
江利子は胸がつまってすぐには声がだせなかった。けれど一瞬の後、江利子は叫んだ。

「ここでえーす、井川さあーん、私はここ：」

叫びながら江利子は泣き声になった。足がもつれて動けない江利子を康介が見付けて、

「どうしたんですか。こんな所まできて。心配するじゃないですか」

傍まできた康介は強い声をだした。あきらかに怒っていると分かる声だった。

「すみません、私、私：別に死のうと思ったわけでは：」

「当たり前ですよ、死なれたりしたらこちらがいい迷惑だ」

康介はダウンのジャケットも着ずに、ジーンズ地の短いブルゾン姿で、頬は寒さに真っ赤になっていた。江利子はすまなさに身をちぢめて謝りながら、思わず泣きじやくった。

康介が寒さにふるえているのが分かって、江利子はわっと泣きながら井川にとりすがった。受けとめた井川が腕に力をいれて、江利子を抱き締め、江利子に氷のような頬をつけながら、

ささやいた。

「よかった。どうなったかと思った。本当によかった」

夫をなくして以来、いつもどこか鎧を着ているようだった江利子は、初めて破れかぶれで大声で泣いていた。木村の前で一度だけ涙をみせて以来、江利子は意地でも人前で悲しい顔をしないうできた。あきれた嫁だと親類じゅうに非難されながらも、押さえつづけた涙が、今一度にあふれ出てきたようだった。

「泣かないで。涙が凍って頬が痛くなりますよ」

井川が手袋で江利子の頬をふいて言った。江利子の重みを支えて井川は抱いた手に力をいれた。彼女の涙が自分が迎えにきたためばかりではないのを、井川は感じていた。どこか心の深い所に傷があつて、そこから流れ出てくる血のような涙であると思った。井川は江利子を抱き締めながら、この女なら一緒に生きていけるかもしれないと唐突に思った。

祥子はバスタブに湯をはっていた。まわりが静かなせいで、水の音が大きくひびく。

最初の夜、激しい音で驚いて目覚めると、ホテルの隣室のバスの水音だった。それ以来湯をいれる時、少しばかり隣室が気になる。早く湯を止めたいと思うのである。水は硬水らしく、

手に感じる感触が少し違った。困るのは髪にブラシをあてると、

静電気のせいか髪の毛が宙に浮いて下りてこない事である。毛が逆立ったままの自分の顔を鏡の中にみて一人で笑ってしまう。

青灰色に塗られたホテルは、深い雪の中に立っていて、窓枠だけが白い。ベッドが二つ入ったゆったりとした部屋には、壁に三枚のグリズリー（灰色熊）の絵がかけてあり、カーテンの向こうは黒トウヒの林であった。地面はどこも白々と雪におおわれていて、誰の足跡もついていない。朝早く目覚めてカーテンをあけると、黒トウヒの林の背後の空が、ゆっくりとあかね色に染まって夜があけてくるから、そちらが東なのだろう。

祥子たちはその日、フェアバンクスから約四〇キロの所へパイプラインを見に行った。深い雪の中に、二本の鉄の支柱がコンクリートの板をささえ、そのコンクリートの上に四本の短い柱をもった鉄金具がつけられて、パイプラインはその上の上になっていた。二本の鉄の支柱の先には、熱を逃すための工夫だといふ白い襖のようなものがとりつけられている。そんな支柱が約三〇メートルの間隔で雪の上に力強く立ち、えんえんと伸びる銀色のパイプを支えているのだった。直径一メートル半もありそうなパイプは、祥子たちの背丈よりも上にあつて、凍土をとかさない工夫と同時に、季節移動をするカリブーたちが十分に

その下をくぐって移動できる配慮がされているのだった。

北海ほっかいに面したプルドベイと呼ばれる港から、日本の四倍もあるアラスカ大陸を文字どおり縦断して、太平洋側のバルディーズまで、山を越え、谷を渡り、ある時は地にもぐり、また現われて、原油を運ぶパイプラインの長さは、東京から博多よりまだ長い一二八〇キロときいて、祥子しょうこは信じられない思いだった。

前日の井川いかわの話が思い浮かんだ。

一八六七年、ロシアからアラスカを買った時、アメリカの国務長官スワードは、巨大な冷蔵庫を買った男と国民から非難されたと言う。けれどやがて、一八八〇年代にシトカ、ジュノーと相次いで金鉱が発見されると、アラスカにゴールドラッシュが始まる。

しかも、今世紀に入り一九六八年には、北極圏プルドベイで石油と天然ガスが発見される。アメリカはわずか七二〇万ドルで膨大な資源を手に入れたのだった。

問題は、この地の果てで掘り出した原油をどう運ぶかだった。年間九か月は氷に閉ざされる北海ほっかいからの輸送に、氷をくだきながら航行する砕氷タンカーや潜水タンカーも検討されたそうである。そして最後に、アラスカの未開の大自然を越えて、太平洋たいへいよう

岸がんまではこぶ雄大な世界最長のパイプラインが構想されたのだった。が、これに対して、環境破壊に反対する強力な運動が米国や隣国カナダで起こり、建設は宙に浮いた形となった。

第四次中東戦争で、アメリカは深刻な石油危機せきゆうきに見まわれる。アラブ産油国が足並みそろえて米国への石油、石油製品の輸出を停止したのである。エネルギー節約のため、配給制や官庁の週四日制まで検討されるほどの危機だった。油田発見以来、アラスカの自然を破壊すると強く主張する環境保護団体の圧力で凍結されていたパイプライン建設法案は、このエネルギー危機を契機に一九七三年五月議会を通過するのである。そして翌年春には早くも工事が着工された。

油田のあるプルドベイのあたりは、永久凍土とよばれる地球誕生以来一度も溶けたことのない氷の原野げんやである。工事は難航をきわめた。勾配こうばいのある地形を運ぶためには、原油に温度を加える必要がある、その温度がこの凍土にどう影響するか、そのための地面の陥没をどう防ぐか、人類の知恵のあらんかぎりが動員されての工事だった。

一九七七年六月二十日、完成したアラスカパイプラインは運転を開始する。ところが翌月四日、爆発を防ぐために原油を先導する形で送り込まれている窒素ガスが、ちょうど中間地点フ

エアバンクスに近い第八ポンプステーション付近でガス漏れをおこす。ただちに送油は中止され、原因究明の結果、四センチほどの栓の故障と判明し、修理。再び、原油は時速二キロの速さで流され始める。しかしその直後、八日午後、同じ場所で大爆発事故が起こるのである。二人死亡、四十人が怪我。難航に難航を重ねて、最初の原油が終着地点のバルディーズに到着したのは、開通以来七〇日目の、八月も二十八日の夜だった。

祥子は、前日に見せて貰ったパイプラインの構造や工夫についてビデオを、思い起こしながら、パイプラインの前に立っていた。

今、それは、雪の中で静まりかえって自然の一部のように風景の中にとけこんでいる。太陽の光を銀色に反射しながら、視野のかぎりのびているパイプに、祥子は伸び上がって手をふれてみた。サラサラと表面の雪が、手袋について落ちてきた。

人間というのは、なんととてつもない事をするのであろうか。どんな不可能も、可能にしてしまう人類という生きもの。それは、ある時は不遜であり、他の生物の領域をおかしながら自らの繁栄を追求してやまない困った存在であるかもしれない。けれど祥子は、そう思いながらも、この真つすぐにのびたパイプラインの前に立ち、手でふれて、身体のふるえるような感動を

覚えた。祥子の知らない数知れない人たちが、この建設に力をあわせて立ち働くのが、雪の原野に幻のように見える思いだった。

考えてみれば、祥子の住んでいる町の近くに、瀬戸大橋が完成するのは、アラスカパイプラインの完成後、約十年たったの事である。

そんな夢のような事：海に橋をかけるなんて：最初はそう思っていた祥子は、毎日のように工事の進展を逐一知らせるテレビの報道を、やがて夢中になってみるようになった。そのうち、車を運転して、海に突き出た橋脚の予定地まで行き、たゆみない着実な工事を自分の目で眺めてみずにはいられなくなった。小さな島が爆破されて姿を消し、巨大なケーソンが鏡のような海面をすべるように移動し、やがて海の上に橋脚が現われはじめると、祥子の心は偉大な交響曲を聞く時のように、ざわざわと胸騒ぎがして落ち着かなくなった。

太い鋼鉄のロープがはり渡され、少しずつ少しずつ橋が伸びていく。祥子は心がゆさぶられた。ある日は、目のくらむような橋柱のてっぺんで、鋼鉄のロープにしがみつくようにして、汗をしたたらせている若者の姿が画面に映しだされることもあった。海面に次第に姿を現し始める橋は、完璧に美しく、静謐

で、しかも力強く、祥子は自分の生き方を、衿を正して考え直してみずにはいられない気持ちになった。

その頃、祥子は橋の工事に携わっている一人の青年の話をきいたことがある。

世界最長の橋の工事を始めるにあたって、英国のフォース橋を見るために派遣された青年の話である。彼はロンドンから列車でエディンバラに着くと、エディンバラ城を見ることもなく、中世そのままの石の町を歩くこともなく、その足でフォース橋まで出掛けた。滞在は三日間と決められていて、会社が連絡をとってくれた事務所は、分厚い資料を渡して説明しようとしたが青年はそれを断り、一時も惜しむようにフォース橋にかけつけたという。彼は橋に到着すると、しげしげと眺め、らんかん  
に手で触れ、橋を歩き、風に吹かれ、頬をつけ、また眺めた。次の日も、また次の日も、青年はただ、橋の傍に出掛け、魅入られたように眺めつづけたというのであった。

橋は美しかった。美しくデザインされているからではなく、機能を追求した果ての、無駄をすべて捨て去った後の美しさだった。彼はそれに魂を奪われたのである。

帰国して、上司の前にでた時、彼には報告することは何もなかった。彼はただ、手でさわった橋の感触、百年近くも前に建

設された橋が、どんなに堅牢だったかを口数少なく語っただけだった。上司は

「城は見たか。町はどうだった」

とたずねた。彼は驚いた目をあげて首をふり、

「あの橋ほど美しいものが他にあるうとは思えません。あの橋が、私は、何て言えばいいか、好きで、三日間通いつめました」

二人の間にしばらく沈黙があり、上司は言ったという。

「そうか。ご苦労だった。その気持ちで、君も後世に残る橋を造ってくれ」

橋が好きでたまらないそんな男たちの思いがこもっているから、橋はこんなにも自分の心を魅きつけるのだと、祥子はその話をきいた時思ったのであった。

橋の工事の十年間は、祥子の悩み多い年月と重なっていた。

祥子は今でも、あの橋からもう一度、自分らしく、一人で生きていく勇気を得たと思っている。

一人で生きてきた五年の間に、人間関係の難しさも、イヤというほど味わった。仕事が出来ても出来なくても、日本の社会では女は生きにくかった。オリのようにたまった心のサビを、まだ見たこともないオーロラが落としてくれるのではないかと、祥子はこの旅のパンフレットをみた時思ったのである。

湯のはられたバスタブの中で、祥子は自分の身体を抱き締め  
ていた。

ふいにノーマンの事を思った。

自分の姓も住所も変わった事をノーマンに知らさなかったのは、彼の気持ちに負担をかけたくないからと自分では思っていたが、考えてみれば、それはずいぶんうぬぼれた考えだった。この極寒の地にやってきて、生き延びる事が最重要事である人々の暮らしの中に身をおくと、見栄をはって、自分を優位にかけひきするような生き方が、真実つまらないものに思われてくる。

アラスカは、これでも春なのだいかわこうすけと井川康介が言っていた。

ノーマンの住む町も、カナダとの境の町で、深い雪に半年以上閉ざされて暮らすのだと彼は言った。

湯からあがり、洗った髪をタオルでまいて、祥子はパジャマの上にガウンをはおって椅子に腰をおろした。ノーマンに電話しようと思った。正直に、心から正直になって、ノーマンと話そう。離婚の事も、高校で教えている事も、それから今アラスカに来て、彼の事を想っている事も、みんな正直に話したい。ノーマンからのあの手紙の中で裸にされて以来、ノーマンを思

うと祥子の身体にぐらりと燃え上ってくる欲望については話せない。けれど、おそらくノーマンは察するだろう。

祥子は電話の横においてある使用説明に目を通してから、自分のアドレスブックを見ながらゆつくりとボタンをおした。

呼び出し音が鳴っている。あ、時差の事を考えなかったと祥子は思った。けれど、一度置くともう電話する勇気がなくなりそう、じっと待っていた。八回のコールの後、声がかこえた。

「ハロー、ワイトですが：」

低い含みのある、艶のある声だった。ノーマンだと思った。

「ハロー、ノーマン？」

「ノー、父にご用なのですか？」

祥子はあっと、息をのんだ。

「それでは、あなたは、あなたは：リチャードなの、ノーマンの息子さんの？」

「ええ、そうです。どなたですか？」

祥子はそれには答えないで、かぶせるようにたずねた。

「もう、カレッジは終わったの？」

ノーマンが「親である事は重い」といったあの彼の末の息子である。

「はい、この五月がくると卒業です。あなたは：あなたは、ど



なた：あ、アクセントがありますね：あなたは、ミズ・シヨ  
コですか？」

祥子は思いがけない言葉に一瞬頭の中が白くなった。それか  
ら我にかえって、シヨコをファミリーネームだと信じている  
ノーマンの息子にむかって言った。

「そうです。シヨコですわ。お父さまとお話できますか？」

静かな冷静な声をださねばならない、と祥子は気がまえた。

「ミズ・シヨコ、申し訳ないのですが、父は病気です。とて  
も悪いのです」

「本当ですか？」

祥子はリチャードがわざと自分の電話を取り継がないのでは  
ないかと思って言った。

「本当です。今母がきて、この家に滞在して、父の傍にいます」

なんと奇妙な事を、彼は言うのだろう。

「お母さまが来て、滞在って、どういう意味ですか？」

「あの、つまり、父は二年前に母と離婚しました。その後病気  
になって：脳腫瘍なのです。今まで一人でとてもうまくやって  
いたのですが、つまり一人で暮らして：でも急に容体が悪くな  
って、ボクと母がここ一週間、ここにいます。ミズ・シヨコ  
の話は、この前、クリスマスにきた時、聞きました。手紙が住

所不明でかえってきたからシヨコの身に何かあったのもし  
れないけど、探す方法がないのだと：」

どのくらいの事をノーマンが話したのかは分からなかったが、  
祥子は声がかすれた。

「それで、お父さまは、いつか元気になれるのですか：その、  
私がおたずねしているのは、手術とか：あるいは回復の可能性  
とか：」

言いながら祥子は涙声になった。

「ミズ・シヨコ、父のために泣いて下さってありがとう。誰  
か一緒に泣いて下さる人がいるのはナイスです。でも、父はも  
う意識不明で：それで：」

リチャードの声も涙声になった。それから一瞬の後、リチャ  
ードは元の声に戻って、

「父のベッドのそばの電話に、回します。おそらくもう話はで  
きないと思いますが、死んでいく父にとってミズ・シヨコの  
声をきくのは嬉しい事だと思えますから」

「待つてリチャード、一っだけ教えてください。お父さまから  
の手紙にGLYSIDIとあったわ、どういう意味なのかしら」  
「それはボクにもよく書いてくれましたが、God Loves You So  
Do I だと思います」

「神があなたを愛するように私も愛している：と？　ありがとう」

「ミズ・ショーコ、そのまま受話器をもっていて下さい。すぐ父の部屋に回しますから。お電話下さってありがとうございます。父とってあなたは特別な方ですから：」

「いいえ、リチャード、もういいのよ、リチャード」

祥子はいいかけたが、若者の声はきれていた。それから受話器の向こうで物のすれるような音がした。ザーザーとつながれていない電波が、虚空を流れる音のようであった。

祥子は静かに受話器を置いた。それからつながれていない電話にむかって、声に出して言った。

「ありがとう、リチャード。何よりの贈り物を貰ったわ」

ノーマンが死んでいく。考えた事がなかった。いつか、ノーマンの住む町へ行って、ホテルから突然電話して、それから：それから、ノーマンに抱かれるのが祥子のひそかな長い夢であった。勝手にそう空想することで、祥子は淋しい夜を耐えてきたのだった。

足元から地面が落ちて断崖に立ったような気がした。ぐらりと身体がゆれると、永遠の虚無へ落ちていきそうな不安定さだった。

祥子の目の中に、静かに光って地の果てまで伸びているパイプラインが見えた。

すっかりしなくては：祥子は思った。今までだって、別にノーマンと会っていたわけではない。自分勝手に、一夏の少年と少女みたいなふれあいを、昔の写真を眺めるように、時に心慰みに思い出していただけではないか。

受話器から手を離して、祥子は立ち上がった。

みぞおちが痛かった。歯ぎしりしたいような後悔が黒い霧のようにその痛い部分からわきだし、濃く分厚くなって祥子を巻き込み、その渦の真ん中に祥子は閉じこめられた。

「なぜ、もっと早く、連絡をしなかったのだろう。せめて、病気の彼のベッドに飛んでいけるくらい早く。クリスマスカードを昨年だしていれば、間にあったかもしれないのに」

とりかえしのつかない事をした。リチャードに彼は、どう話したのか。彼の離婚の原因は何だったのか。そんな事はいいけれど、その後の孤独を、せめて手紙で分かちあうこともできたのには：

祥子の目に、ゴォーと音をたてて崩れ落ちていった氷河が見えた。青い横縞が何本も入って、所々茶色の土色の筋が交じっていた。何万年も前の氷が、海面につきつぎに落下していく。

まるで人が倒れていくように、雷のような悲しい音をひびかせながら。

あれを「白い雷」と人々は呼ぶのだと、説明があった。白い雷、白い：

波がよせては返すように、ノーマンへの思いと、絶望的な後悔が祥子しょうこをかわるがわる襲っていた。立ち上がった祥子しょうこは、窓に寄ろうとして一歩歩きだしたが、そのまま床に倒れた。天井をむいて、うつろに開いたままの祥子しょうこの目に、白い雷の音とともに涙があふれてきた。

山村やまむらかすみもまた、白い雷の音を感じていた。

もしあれが本当に母だとしたら、母はいつアラスカへやってきたのだろうか。美しい落葉樹の林がつづくと聞くバーモントという州から、何を思っこの極寒の地へきたのだろうか。それはおそらくはパイプラインの建設された七十年代だったのではなかったのか。

かすみは今まで考えたこともなかったアラスカの歴史を、井川いかわの説明を思い出しながら考えていた。ジュノーやシトカという町の名前が金鉱の町としても紹介され、一九四二年には、日本軍がアリューシャン列島を攻撃したので、アメリカ軍が増

兵されました」と井川いかわはまだ彼自身は生まれてもない頃の話  
を、淡々と話したのであった。ゴールドラッシュにつぐ人口増  
加はその時期です：かすみは自分の父も、もしかしたらその日  
本兵の中にいたのではないかと思っ、はっとなった。

それから井川いかわは、パイプラインの話に移った。となくの一種であるカリブーが、ブルックス山脈を越え、千キロに渡って季節移動をするアラスカの悠久の自然。それを、開発するにあたっては、激しい議論が展開されたという。カリブーが季節移動をするのは、それを食べるためだといわれる地衣ちい―白いけけのような植物だったが―は、一年に一・六ミリしか成長しないのだと、井川いかわは説明した。

プールドベイにある油田の埋蔵量は、当初少なく見積もっても九十六億バレルと言われていた。当時の米国の全石油消費量の約五百五十二日分だったそうである。けれどもいつか油田は枯れる。人類の飽くことのないエネルギー消費の要求に応じて、新しい油田の探索が行なわれ、今カナダ寄りの海岸部に有望な油田が見つかっています、プールドベイからそこまで海岸にそって横にパイプラインを延長することも考えられているのです。けれど、そこは野性動物保護区で、ここを開発することは、カリブーの餌であるその地衣ちいを枯らすことになりかねない。カリ

ブーはアラスカ生態系のコアです。カリブーは季節移動しながら、子供を生み、その群れは何千頭にもふえて地面を埋めつくすほどになり、移動中に群れの中で死んでいくものもいます。その死体を、オオカミやグリズリーが食べ、血のしたたった跡からは、アラスカのやなぎランや勿忘草わすれなぐさが咲くのです。井川いかわの言葉がよみがえってくる。

雪の中で銀色に輝いていたパイプラインを、かすみたちはバスで見に行ったのである。山脈を越え、谷間をぬい、ある時は地にもぐり、ある時は太陽の中、さんさんと輝き、広大な大陸を地の果てまでつづくパイプライン。永久凍土の上を温度をあげた原油を流す危険についても、井川いかわはビデオを使って説明してくれた。それは人間の文明を維持するか、あるいは地球上唯一残された野生の自然を守るかの選択だったのだろう。ありとあらゆる危険や問題を克服しての設置作業には、日本の企業も関係したと井川いかわは言った。

かすみは、その工事の頃、母はこのフェアバンクスにやってきたのではなかったかと思った。小学校の教師をしていた母は、もしかしたら、工事に派遣された日本人の子供たちを教えるために来たのだったかもしれない。かすみはそう考えたかった。少なくとも、作業にたずさわるあらくれ男たちの通う食堂や

酒場さかばで働いたとは考えたくなかった。

その時母は、夫と一緒にだったのだろうか。それとも、もうすでに一人だったのか。

母の事を考えると、胸が波立って苦しくなる。この歳になっても恋しさで呼吸ができないような気がするほどだ。かすみは寝返りをうって桑野くわのの方をむいた。

「眠れないのか」

「ええ、あんな大事な時にまで、気後れして：私って、ほんとに馬鹿ね」

紫の袋の女に出会った時のことを言っているのだと、桑野くわのには分かった。

桑野くわのの腕がかすみの背をゆっくりとなでた。かすみはそんな桑野くわのの腕の中へもぐりこむようにして、彼の胸に頬をあてた。ドックドックと音のしている桑野くわのの心臓のあたりへ耳をあてて、その音をしばらく聞いていた。気持ちが次第に落ち着いてくるのが分かった。

この彼の体温にかこまれた暖かな空間にいるかぎり、私は幸福だとかすみは思った。

母の人生にも、このような安らぎの瞬間がきつとあったに違いない。それは日本に残してきた子供への苦しい思いをおぎな

って余りある安らぎだったのだろう。

母の幸福を、かすみは素直に喜べる気がした。今もそうであって欲しいと思った。

背をなでていた桑野の腕がのびて、かすみの胸が開かれ、彼はその胸に顔をうずめてかすみの乳房を吸った。かすみは全身を桑野にゆだね、網膜の奥に白い氷河がゆっくりと落下する様をみながら、身体じゅうが熱くなった。

遠い雷の音がしている。ああ、白い雷だとかすみは思った。かすみの身体の中で何度も感覚が炸裂し、かすみは声をあげて、落下する氷河の中で桑野にしがみついた。

「氷河が見たいですわ」

江利子がダウンタウンを歩きながら言った。すぐ前を歩いていた井川康介が思わず「えっ」と振り向いた。雪と寒さで、かなり懲りた筈の江利子が、まだ氷河を見たいという。

「フェアバンクスでは無理ですよ。残念ながら……」

「分かっていますわ。でも、いつか」

小さなデパートに着いて、康介は一時間ほど後の集合時間を確認し、自由に買物をして下さいと言った。またたく間に一行が散ったのに、江利子は康介の傍から離れなかった。

「買物、興味ないんですか」

「ええ、今までに、一生分の買物、してしまっただようで、あまり気がのりませんの」

「よほど、浪費家だったように聞こえますね」

「夫が生きていた頃の話ですから。……でも、今一つだけ買ったものがありませんわ」

「なんですか？ このデパートにもあるかもしれませぬよ。探してきたらどうですか？」

江利子はそれに答えずに、ふうと井川康介を見上げて言った。「一つ、質問してもいいですか」

「どうぞ。なんなりと。アラスカの事でしたら、一応答えられると思います」

江利子は真面目な顔でたずねた。

「そのセーター、どのくらい着ていらつしやるのですか」

井川康介は不意をうたれ、びっくりして一瞬黙った。

「ひじの所、穴があいていますわ」

康介の灰色と茶色の編み込み模様のある黒いセーターは、なるほどひじの所が十五センチ近く破れていた。

「でも別にひじが破れていても、身体が暖かければいいでしょう。気にした事ありません。もう、そうですね、十年かある

いは十一年着ています。おかしいですか？」

「いいえ、あなたが着てらっしゃると、まるで流行みたいに見えますわ。若者の：」

康介はセーターの下に、紺色のボアのようなシャツを着ていた。ひじの所が、楕円形にあいて、その下から起毛した紺色のシャツが、ちょうどわざわざひじあてを縫い付けたように見えた。手も足も首も長くみえるのは、彼がやせて背が高いせいなのだろう。

「若者の？」

それから康介は、うなづく江利子をみて笑って言った。

「そうですね。この人たちの中では、ボクとあなたが若者ですね」

「あら、私は：」

いかけて江利子は心が明るくなった。康介が自分を彼の仲間だと考えていてくれるのが嬉しかった。けれど一瞬の後に、江利子はほんの少し網目の糸が何かにひっかかってゆるんだだけで、二度と手を通さなかった夫のセーターのあれこれを出した。江利子が好きで選んで買ったものばかりだったので、その位のことでは捨てられないで、江利子は何枚も自分の引き出しにしまっていた。しぶい茶色にグレーで雪の模様が編み出

してあるセーターなどは、自分にも似合いそうで、庭仕事をす  
る時、出して着ていると、夫は極端にいやな顔をした。

「捨てなさい。自分が着るのは新しいのを買ってきなさい」

江利子は仕方なくまた引き出しにしまっておいたが、夫の葬式の後、全てゴミ袋に入れて捨てた。あの時の激しい怒りがよみがえってきて、江利子は厳しい顔になった。

「どうかしましたか」

江利子は、そんな井川康介の声に呼びさまされたように大きく首を振って笑った。

「私を若者の仲間に入れて下さって、なんだか浮き浮きしますわ。ありがとう」

「何が買いたいんですか。一緒に売場を探しましょうか？」

井川康介がきいた。江利子はうなずいて、まっすぐ彼を見上げて言った。

「私が今、買いたいのは、あなたのセーターですわ：気を悪く  
なさった？」

「：不要です。これで充分暖かいですから」

「買わせては下さらないのね」

「勿論です。日本人はこれだからイヤだ」

「おしつけがましくて、傲慢だと？」

「そうですよ、当たり前です。人の事は人の事、ほっといて下さい」

心底いやそうに見えたので、江利子は踏み込みすぎたと後悔した。

「すみません。せっかく若者って言って下さったのに、やはりダメですわね、私」

井川康介は、そんな江利子を残して、二階にあがった。どういうわけか、エスカレーターがとまっていて、彼はそれを階段のように一段とばしに駆け上がって二階に行った。

アラスカでは、みんな着るものなど、暖かくさえあれば外見など気にしたりしないのだと、江利子にもう一度言えばよかったと思った。康介の仲間は少なくともみんな、穴があいたセーターも平気で着ていたし、それにジーンズは、わざとかぎざきをいれて、糸をほつれさせて着ている者さえいるのだから。

二階は電気製品の売場だった。日本製が圧倒的に多かった。トースターや、コーヒーマーカーや、それからホットプレートと呼ぶ丸い卓上での調理器具など、ローマ字でかかれた日本のメーカー名を読むだけで、康介は心が柔らかくなるような気がする。彼は時々、中古車の販売店にも出掛けて、日本車をゆっくり一台一台見てまわる事もある。こんなにアラスカが好きで、

住み馴れたと思っっているのに、自分はやはりいつも身構えて、英語社会では神経をとがらせて生きているのだ、自分はもう祖国を捨てた気であるのに、どうしようもなく日本人なんだと、康介はそんな時、はがゆいような哀しいような気持ちで思うのだった。

フェアバンクス空港はまぶしいように晴れていた。一面の雪野原に、小さな昆虫が羽を休めているように飛行機が並んでいる。あの中の一つに乗って、マッキンリーを越えて飛ぶのかと思うと、少し心細いほど、機体が小さく見える。

ガラス張りのロビーが明るすぎて、祥子は他の人たちと目をあわせられない。あれ以来何をしても身体に力が入らない気がする。空港の中のみやげもの店に入り、買物に熱中するふりをして、祥子はなるべく他の人と口をきかないようにした。

男たちが、綾川をかこんで話していた。

「それで、結局、どうだったんですか。ガソリンに酸素化合物をまぜてオクタン価をあげると、フェアバンクスでだけなぞ頭痛や吐き気を訴える人が出たのか、原因ははっきりしましたか」  
深田が言った。オーロラを待ちながら、綾川がフェアバンクスへ来て知りたいことがあると言ったのを覚えていたのである。

「いやあ、赤祖父教授にも電話をかけてみたんですがね。目下アラスカ大学でも調査研究が行なわれているところだとの返事でしたよ」

それから、これは私的な意見だが、と綾川は話し始めた。

「まあ、ガソリンは化学的にみれば炭化水素ですから、完全燃焼すれば炭酸ガスと水になり、これは問題ないんですよ。だが、不完全燃焼すると、一酸化炭素と、燃え損なった炭化水素である未炭化水素がでできます。アラスカのような極寒地では、エンジンが温まるのが遅いですから未炭化水素が普通より多く排出されると考えていいと思いますね。もともと、今の車は、排気管に触媒装置が取り付けられていて、一酸化炭素を炭酸ガスに変えて、未炭化水素を排気管内で燃やしてしまうような工夫がされているんですがね。しかし、低温の間はこの触媒が働かない。これは低温運転中も同じです」

「いやあ、私もここへきて初めて、建物の外にとりつけてあるコンセントにプラグをさしこんで車をつないでいるのを見ましたね。零下何十度と言う気候では、ああやって夜じゆうエンジンを伝熱加温しておかないと、朝になってエンジンがかからないんですよ」

車が、昔の馬車をひく馬たちのように、建物の角にあるさし

こみ口から、太い電線に繋がれて駐車している様子は、誰にとっても初めてみる光景だった。一度様子たちのバスがほんの少しの間キャンパスに駐車しただけで動かなくなり、運転手があわてて別の車を手配したこともある。建物の傍に駐車できなくて、プラグをつなげなかったのだろう。

「そうできない車は、ずっとアイドリングしてますね。昼となく夜となくね。ありや、空気を汚しているでしょうなあ」

男たちが口々に口をはさんだ後、もう一度、綾川が説明した。

「問題はそこですよ。つまり考えられることは、通常のガソリンと、含酸素化合物の混合した新ガソリンとは、不完全燃焼の排気の質に違いがあるのではないかということですよ。含酸素化合物はそれ自身の中に酸素を含んでいますから、炭化水素が外から酸素を取り込んで燃焼するよりも効率がよいことは確かで、排気ガスの清浄化もねらえるんですが、しかし、それが、おっしゃるように不完全燃焼して、未燃の形で排出された場合、問題が生じたんだと思いますね。専門的になりますが、日本とアメリカでは、この酸素化合物としてMTBE、メチルターシャリブチル・エーテルというんですがね―を混合しているんですよ。経済的理由からこれが一番コストがやすい」

男たちの顔が真剣になり、綾川の口元を見つめている。



「炭化水素の最もシンプルなメタンを考えると、ですね。

メタンだけなら生体に対して毒にも薬にもならないのに、これに酸素が入ってメタノールとなると：これは別名メチルアルコールですが：生体に対して毒作用があります。同様にイソブタンも酸素が入ってイソブチルアルコールになると、少量の飲用で頭痛を起こすんです。ですから、何の作用ももたない炭化水素と、生体に対してある種の作用をもつ含酸素化合物をくらべれば、頭痛や吐き気があったとしても、不思議はない。私が考えられるのはそのくらいの事ですね。ここへ来てみて、アイドリッドから走行状態にはいってもなおエンジンが温まるのは遅いようですから、燃えないで排出される未燃化水素は考えていたよりずっと多いだろうと思いましたがね。極寒地であることに加えて、フェアバンクス特有の地形もあると思うのですが：まあ、結論はアラスカ大学の調査に待たねばならないと思います」

大学の先輩後輩だと自分たちのことを紹介した吉川が、口をはさんだ。

「いやあ、メチルアルコールはひどいですなあ、あれを戦後飲んで失明した人の話をきいたことがありますよ」

そうそう、そういうことも一時多かったですなあーと男たちは一斉に酒の話に移っていった。

祥子は、みやげもの店で、近くの金鉱から採掘された親指の先ほどの金の原石を、そのまま鎖につないでペンダントにしたのを、手にとって眺めたが、結局買わなかった。

ノーマンの死を思い出さずにはいられないアラスカのペンダントを、自分につけることができるだろうか？ 祥子は自信がなかった。何をしてもしも身体にまるで力が入らない。人は、些細な、ほんの小さな事によって支えられて生きてるのであるのか。まるで霞によりかかっているような頼りなさで、何一つ確かめられない、そんな遠くのノーマンの存在が、それだけで自分を今まで支えていたのだろうか。そんな筈はないではないか。祥子は首を振って、傍にあった新聞をとって小銭を払った。

江利子は、少し疲れた様子でじっと椅子に座っていた。日本に戻るのがおっくうな気がした。まだ一年しか働いていないのに「アラスカへ出張だよ」とみんなの前で木村が言った時、江利子は同僚からの、まるでとがめるような鋭い視線を頬に感じた。木村が江利子の父の友人だと知らない者もあって、木村と特別な関係でもあるのでは——と言われた事もある。雪のアラスカでは、そんな煩わしさから逃れて、自由に、のびのびと時間を過ごした。また日常に戻るのかと思うと残念で、江利子は

ひどく投げ遣りな気持ちになった。また、あの一人ぼっちの宿舎で、夫の幻影に悩まされて夜を過ごさねばならない。時々ひどく心細くて、自分もまた死の誘惑を感じる事がある――馬鹿な事なのに。

江利子がひどく哀しそうにみえたので、井川康介は心配になつて傍に寄つていった。

「大丈夫ですか。気分でも悪いのですか？」

江利子が、ものうげに顔をあげて、康介を見つめて答えた。

「いいえ、大丈夫ですわ。ただ、：日本に帰りたくなくて：おかしいですわね」

「ボクと同じような事を言いますね」

康介が白い歯を見せて笑つた。今日もあの、ひじのぬけたセーターを着ている。

「アラスカへ一度でも来た人は、みんなアラスカのとりこになります。アラスカは、不思議な魅力をもっていますから」

「本当ですわ。もう一度、来たいと思えますもの。氷河の落下する瞬間をぜひ見たい」

康介は、雪の中でスキーをはいたまま泣いていた江利子を、そして近寄ると腕のなかにと倒れ込んできた江利子の豊かな重みを思いだした。あの瞬間に自分をおそつた唐突な思いを彼は

忘れてはいなかった。馬鹿な事を思つたものだと思う。

「来年またいらして下さい。今度は氷河へ案内します。一緒に観光船に乗りましょう」

「：本気にしますわ、私」

江利子は声をひくめて言つた。

「：勿論、ボクも本気です」

江利子が康介を見上げた。その眼をまっすぐ受けとめて、康介はうなずいた。

江利子は、ああ、これで一年は生きられると思つた。井川康介と氷河を見るのだからと自分をなだめながら、一年間一人ぼっちの夜をアラスカの本を読んで暮らそう。

人は、そんな、他人から見たらどうでもいいような小さな事に支えられて生きているのだ。康介の一言を頼りに、私にだつて生きられないことはないだろう。

「井川さん」と呼ばれて、「じゃっ」とうなずいて江利子の所から去つていった青年の背を、江利子はしばらく見つめていた。

帰ったら、働いている出版社のイベントとして、アラスカ旅行の計画をたてねばならない。毎夜ホテルの部屋で、くわしい記録をとつてあるから、それはむずかしいことではないだろう。パイプラインやオーロラを見た後、チェナ温泉での週末も

いれることにしよう：けれどそれとは別に、自分一人のために、  
康介と行くシトカやグレーシャーベイを訪れる旅も計画しよう  
—江利子は心がやわらいでくるのを覚えた。

江利子よりいくつか年下に見える青年と自分は、どこか共通  
のものがあある：江利子は思った。それは、言ってみれば、社会  
から隔絶された孤立を恐れながらも、どうしようもなく魅かれ  
て、そこに入っていくかずにはいられないようなところだ。

雪に閉じ込められた真冬のフェアバンクスの孤独がどんなも  
のか、江利子は想像できない。けれど、その中でじっと何日も  
何日も、窓から真つ白な雪だけを眺めて暮らす自分を想像する  
と、胸のしびれるような陶酔感を覚えた。願わくばその時、ひ  
じの抜けたセーターを着た青年に、どこか別の部屋でいいから、  
赤あかと火の燃える暖炉の傍で本でも読んで欲しいのだっ  
た。江利子は心に浮かんだその甘い空想に恥じ入り、頭を振っ  
てそれを追い払おうとした。けれど一瞬の後に、あんな哀しい  
事があったのだから、これくらいの夢はみても許されるのでは  
ないかと思った。

空港の遠くに低い山々が連なって見えた。見渡すかぎり真つ  
白で、ひっそりと静かな光景であった。ああ、これがアラスカ

なのだと、祥子はシートベルトをしめながらも一度外を眺め  
た。機体が滑り出し、滑走路をうなり声をあげて走りだした。  
祥子はうつつすらと涙ぐんで、白い空港に別れをつげた。

機体が安定飛行に入ってから、祥子は手に持っていた新聞を  
広げた。フェアバンクスのタイムスのトップ記事は、イヌぞり  
レースで、一面全体がその記事で埋まっていた。誰がどのくら  
いのタイムで走ったとくわしい記録がのせてあり、雪の中を走  
るアラスカンハスキーたちと、後部のL字型のそりに立って声  
をかけつづけるマッシュヤーの写真が色刷りされていた。祥子は  
その写真をしばらく見つめた。はあッはあッと、雪の降りしき  
る中、走り去っていったあの時のイヌたちの息づかいが耳元で  
よみがえった。

背景には地面にはりついたエスキモアの村が写っていた。ト  
タン張りのような粗末な小屋の、低い屋根のあたりまで、雪に  
埋もれた小さな村であった。海岸ふちらしく、背後には波のか  
たちそのままに凍りついた雪が一面に押し寄せて、白くにごく  
輝いている。

一本の煙突から、かすかに煙があがっていた。木を打ちつけ  
ただけの小屋のような低い家の前に、一匹のイヌが、走ってい  
くイヌぞりを眺めて吠えていた。荒々しいイヌたちの息づかい

と激しい吠え声が聞こえるような写真だった。何日も走り通して、足の裏がはれてしまうアラスカンハスキーたちは、ひとときの休みの間、痛む足の裏を天にむけて、雪に背をつけて眠りこけるのだと話にきいた。彼らが今、走り抜けようとしているこの小さな村。こんな孤独な地の果てにも、人は住んでいる。それはどんな人生なのだろうか。

しばらくその写真を眺めてから、ページをくつていくと、交通事故の記事がでていた。何気なく目をすべらせていたが、祥子はタクシーという言葉にひっかかって、もう一度その記事を読みなおした。タクシーが道路に出て来た巨大なムースをさけようとして、森の中で道から滑り落ち、斜面の木に激突したという記事であった。運転手は大げが、乗っていた女性が車から放り出されて亡くなったと、書かれてある。女性の名前はシャリー・ヤマ・トンブソン。「ヤマ」というのは日本語の発音に似ていると祥子は思った。インディアンの言葉も母音と子音を一つずつ組み合わせた音が多いから、この女性は原住民の人なのだろう。祥子は、事故の写真は何気なく見てはつととなった。写真の隅に、車から投げ出された荷物が散らばっており、中に、何か手提げ袋のようなものが写っていた。カラー写真ではないので、色は分からない。袋には表面に模様があり、じっと見て

いると、それはどうやら花束のようにみえた。まさか：と祥子は思った。あの紫の花の袋ではないのか。祥子は目をこらしてなおその写真のひとすみを見つめつづけた。まちがいなく、あの袋のようであった。

「ナイス ミーティング ユー」  
そういつて手をのばしてきた女の声が、祥子の耳元によみがえった。あの手の暖かさ、こんな雪の原野にわずかに開かれた人口の少ない町では、人はみな優しく人恋しくなるのだと、あの時、祥子はそんないきずりの女の人なつつこさを不思議とも思わなかった。自分も両手で彼女の手を握りしめた。ああ、あれは、あの裏皮のコートを着た女の、この世への別れの挨拶だったのではないのだろうか。

祥子の心に、日本人そっくりだった女の顔立ちが思いうかんだ。と同時に、祥子はノーマンの笑顔も思い出していた。あの時、ノーマン、私はあなたからも別れの挨拶をうけていたのね。もしかしたら、あなたは恋するあまり、アメリカにとどまり、あの女のように、一人、冬の町で暮らす事になっていたかもしれなかった私に、あなたは死の床から、別れの挨拶をしてくれたのね、きつと……。

ひきこまれそうな淋しさが祥子をおそった。見渡すかぎり凍

った北極海に風が吹き荒ぶ光景が、祥子の心にひろがってきた。  
祥子は新聞をとじて、シートによりかかった。一緒にアラスカへきた人たちに、この事故の事は言わないでおこう：祥子は思った。

後の席で、桑野と山村かすみが話すのが聞こえた。

「いい所だったわ。今度は夏に來たいわね」

「夏は大きな蚊がいるって、言っていたよ。追い払っても追いかつてもダメなんだって」

「あら、それは困るわね。私、虫は苦手よ」

祥子は目頭をおさえてから、窓の外をながめた。眼下には一面に灰白色の原野が広がっていた。ところどころ、黒トウヒの森がみえたが、他はただ灰色で、その中を大きな白い川が蛇行し、にぶく光っている。あれがユーン川なのだろう。けれど今、川にも水はないのであった。ただしらじらと無機質の氷が、大きくふくらんでS字型にうねりながら、地の果てまでつづいているのみであった。

けれど、春になれば：祥子は思った。

春になれば、また川は流れだすだろう。グリズリーが冬眠からさめて、再び繁殖の季節が来るのだ。ノーマンや、あの紫の袋を持った女がいなくても、そしていつか、私自身が死んでし

まった後も、アラスカにはオーロラが舞い、氷河が落下し、やなぎランが咲き続ける：

人は、限りある時間をせいっぱい生きるしかないのだ。

閉じた祥子の目の奥に、白く輝くパイプラインが見え、それからわずかに、力のようなものが、胸の片すみにわき上がってくるのが分かった。